女鑑

明治廿七年四月五日發行

第六十號

東京國光社

女鑑第六十號目次

鈴木のぶ子



女鑑　第六十號

女鑑

思想の發達と養成

人の思想は、其の見る所のものと、接する所のものとに就きて、種々の變化を生ずるものなり。其の正路に向ふも、邪徑に陷るも、すべて、其の養成の方、宜を得ると、得ざるとによらざるはなし。

故に、人は、成長するゝ從ひ、其の思想の發達すると共に、陷るべき邪徑も多く、忌むべき弊風も、亦、生ずるものなり。されば、其の養成の法に於いては、最、意を致さゞるべからざるものあるなり。若、これを忽にするときは、其の害は、大は、天下に滿ち、海内に及ぼし、小は、一人一家に及ぶものあり。豈、懼

るべきことならずや。

さて、此の思想の起原する所は、人の生まるゝ初よりなれども、成長するに伴ひて、いたく發達するものは、自然なり。而して、日々の經驗によりて、進歩をなせること、人々の、自身に省みて、能く知り得る所ならん。

凡、人の心の活動は、必、四肢五體の感覺より起こる。而して、四肢五體の、事物に感ずるや、すべて、皆、眞實ならざるはなし。譬へば、目の、物を見るに、其の美惡大小と、形體色質とを明まし、耳の、音聲を聞くに、其の清濁遠近と、雅俗靜騷とを定むるが如き、口の、味に於ける、鼻の、香に於ける、四肢の、寒暑痛痒に於けるが如きは、皆、事と、物との實を知るものにあらざるはなし。然るに、心の方針、一たび、其の所を失はゞ、美を見るも、却りて美ならず、惡をも

見るも、其の悪を曉らず。静にして清める音を聞くも、快きを覺らず。騒がしくして濁れる聲を耳にするも、却りて樂しむものあり。大率、其の是非を轉倒し、理否を誤るに至るなり。

人の性は、初より、斯の如く、異なるにはあらず。故に、其の物に就きて發こる感念と、思想とは、未、初より甚しき差異あるべからず。唯、養成と、習慣とによりて、或は、種々の區別を生ずるに至るなり。試に、其の一二を例せば、二人同じく、飴を見るに、一人は、之をもて、親に奉らば、其の歡を得んことを思ひ、一人は、之をもて、戸樞に用ゐば、必、其の利を得んことを思ふ。又、一人は、人を殘虐にして、火炮として、これを樂しみ、一人は、之を見て、悲しみ傷むが如きは、其の、最、著きものなり。又、或は、文藝を好みて、和歌にま

れ、詩文にまれ、其の優美なる思、高潔なる情、悲愴なる心、憤怒の樣、喜悦の狀、和樂の趣など、詠み出で、書き綴り、心の中に蓄ふるものを、すべて表すも、政事に、心を用ゐて、彼の事、此の事と、世上百般の出來事に注意して、其の事ごとに、古今の例を考へ徵して、適當なる處分をなすべき見識を定むるも、殖產の事、貿易の事など、國家の爲、公共の爲、利益を計る等に、心をくだくも、道理を明にし、書を著して、天下後世の爲に、人の標準を定めんとするも、繪畫彫刻などにて、造化の美をも奪はん程の、麗しく、且、品位の高尙なる一種の美術を現出せんとするも、其の他の工藝技術よ、精神を凝らすも、皆、各自の心に感奮する所に就きて、其の精神を籠めて、必、其の成蹟を著さんとするものは、卽、思想の純にして、正なるなり。然れども、この中にして、或は、一人

一個の功名利益をのみ、事として、人を先にし、人を達することを知らざるが如きものあるは、所謂、邪徑に陷るものなり。故に、吾人は、深く、人の思想の、いたく發達して、早く、幼稚なる境界を脱せんことを期すると共に、其の、必、完全にして、曲らず、邪ならず、正路に向ひて、進歩し、發達して、人生當然の本務を盡くして、少の遺憾なきの極に達せんことを希望して止まざるなり。

論説

恭儉己を持し博愛衆に及ぼす

細川潤次郎

恭儉、己を持し、博愛衆に及ぼすとは、教育に關する勅語中に宣へる所なり。今、謹みて、此の二句を、專、婦人女子に適切に講述す可し。而して、博愛、衆

に及ぼすことは、此の講述の緒餘にして、主とする所のものは、恭儉、己を持するの一句に過ぎず。更に、之を約するときは、恭儉二字の講述と謂ひて不可なることなかる可し

恭儉の二字の內、先、恭の字より說き始む可く、且、其の字義を略述すべし。恭と曰ひ、敬と曰ふ、粗、同一のことなれども、分別して言ふときは、恭とは、言語動作の、表面に顯るゝ者を謂ひ、敬とは、裏面に在りて、專、精神の檢束する所あるを指す者なり。然れども、古書中に、之を混同して用ゐたること、其の例少なしとせず。此處の恭の如きは、內外の別なかる可く、恭敬二字の義を包含したる者としても、不可なることなかる可し。而のみならず、人事の表面に顯るる者は、人心に基かざる者なければ、恭の字義に付いては、內外の別なしと雖、

恭の本源は、裏面に在るものとして、間違なかる可し。又、恭の効用を論ずるときは、廣大無邊のものにして、人間社會の交際は、之に由りて成り立つことを得可し。家に在りて孝、國に在りて忠、朋友と交はりて信なることなど、渾て、同一の種子より生ず可きものなれば、恭は、種々の美菓の、由りて出づる所なり。勅語に所謂、拳々服膺す可きことの一部分を占めたるは、此等の効用あるに由れるならん。恭の字の解釋、及、其の効用に付いては、此の位にて閣く可し。

恭は、此の如く、美徳なるを以て、男女兩性、貴賤老少を擇ばず、拳々服膺して、躬行實踐す可きものたることは、固より、論を待たず。然れども、男子は、剛强の質を具へ、諸般の勞役に就き、論辯、若くは、戰鬪の事にさへ當る可き者な

れば、恭を實行するに易からざるの傾向なきに非ず。而るに、婦人女子に至りては、溫柔の性、優美の風を具へたる者にして、敎へず學ばずして、天然に、恭の義に適當せるものゝ如く、實に、恭の字と同時に生まれたるものゝ如し。是、甚、貴重す可きことにして、我輩は、諸氏の、此の性に率ひて、益、之をして、發達せしめんことを冀ふ者なり。而るに、我輩の、年少の頃より、經驗する所に據れば、大に然らざるものあり。諸氏に向ひては、甚、言ひ難きことなれども、婦人女子には、概して、自、高ぶる心あり。自、高ぶるには、種々の事ありて、假如ば、財產ある家なれば、其の財產あるを挾み、門地高ければ、其の門地を誇り、自身に藝能あれば、其の藝能を恃み、家族親戚に、此等の事あれば、其の事を、我が事の如く、鼻に掛くるが如し。此等は、固より、男子にも、之あ

るのみならず、或は、婦人女子よりも甚しきことあらん。然れども、男子は、交際の廣き者なるが故に、自然に練磨して、此の如きは、人に忌み嫌はるゝことなるを知り、多少反省する所ありて、却りて、多く、其の風を見ざることとなれども、婦人女子に在りては、平生、人の尊敬を受くること多きが爲、反省する機會を得ずして、時々、發露することあり。此の如きは、則、全く、恭の義と相反する者にして、天然の美質を傷くること少なからず。是は、啻に、我輩の經驗する所なるのみに非ず、論語の書中にも、女子と、小人とは養ひ難しとす。之を近くれば、則遜はず。之を遠くれば、則怨む。とあれば、孔子は、二千年前に在りて、女子の不遜を認めたり。此の不遜とは、即、不恭の事なれば、不恭は、今に始まらぬことなる可し。世は、聖人と稱せられたる孔子の目鏡を以てすら、

此の如く鑒定して、品評せられたるは、實に哀む可きことならずや。故に、恭は、男女共に遵由す可き大路なれども、特に、婦人女子に向ひて、此の點に注意あらんことを望む。

儉は、別に、說明を要することなかる可し。此の事に付いては、古來の論說、種種にして、之を集むるときは、實に、牛に汗して、棟に充つ可き程のものなれば、余が、更に、喋々するを須ひず。只、宜しく注意す可きことは、是迄、儉の美德たることを知る人は多けれども、其の道を講究すること、未、盡くさゞる所ありしこと是なり。蓋、封建の時代に在りては、華族を始め、多數の士族に至るまで、皆、常祿ありて、常祿の外に、金穀を得ることは、社會の制裁の許さゞる所なれば、各自、常祿の範圍内に在りて、過分の事をなさゞるを以て、儉の道

に合へりとするに過ぎず。平民は至りても、各、其の職業を守りて遷らさるか故に、農工商は、皆、先祖以來の舊業に安んじ、恰、常祿ある者に異ならず。加之、上下の分、判然として、其の制限を逾越することを得ず、時々、節儉の令下り、家宅衣服に至りても、夫々の定則ある故に、縱、豪華を好む人も、其の希望を達することを得ず。職業、已に定まり、縱ひて、收入も一定せる上に、此の如き制裁あるを以て、自然に、儉ならざることを得ず。此等の理由あるに由り、今日に比しては、儉の道を講究する必要少なかりき。然るを、維新以後に至りては、華士族は、皆、其の常祿を失ひ、平民も、其の影響を被りて、常業を失ふ者多く、其の職業は、勝手次第になりて、優勝劣敗の戰爭中に立たざることを得ず、働き食ひの世の中となりたるに、節儉令の如き者は、一もなく、上下、蕩然

として、復、制限あるを見ず。富者は、以て、王侯に擬することを得可くして、貧者は、一日の食をも得ること能はざるに至れり。聊にても油斷するときは、富者も、忽に、貧者となる可く、能く、時機に投ずれは、貧者も、忽に、富者となることを得可き時節なれは、儉の道を講究せずしては叶ふまじ。此の事は、主として、男子たる者の、其の衝に當る可きことなれども、女子も、亦、此の點に注目せざる可からず。此の如きことは、古人の儉を說ける書中には、之なきことなるを以て、爰に、一言せざる可からず。

婦人女子の性は、其の恭に適せるが如く、儉にも、亦、適せるものなる可し。男子は、動もすれは、放佚に流れ、之が爲に、家産を蕩盡する者、比々、皆然り。而して、婦人女子に至りては、此の如き者、殆、希なるを以てしても、亦、其の

性の、儉に適するを徴するに足れり。人家の有樣を通觀するに、婦人女子は、專、內に在りて、嚴に、鎖鑰を守り、男子の費消せんとすることをば、之を拒むこと少なからず。此の如きは、儉と相近き者にして、家政を保持するヿは、固より、欠く可からざることなりとす。然れども、中には、中道を過ぎて、吝嗇と稱す可きものも少なしとせず。是、固より、奬勵す可きことには非ずと雖、儉の中道を過ぎたるものに外ならず。亦、以て、婦人女子の性の、儉と相近きを見るヿ足れり。爰に、婦人女子の性の、此の如く、儉と相近きに似合はざることあり。衣服の物數奇、是なり。衣服は、人生必用のものにして、暑寒共に、相當に、之に應ずる備なかる可からず。時々、澣濯せざるべからざることなれば、着替とてもなかる可からず。又、其の人の身分に應じて、耻づかしからざる樣に

もあらまほしきものなれば、容儀を修むるに必要なる程は、其の人の財産の度に從ひて、之を調製せざる可からず。衣服のみならず、裝飾品も、亦、之と相稱ふ可きは、當然の事にして、少しも咎む可きに非ざる可し。然りと雖、婦人女子の、衣服を調製する有樣を見るに、此の如く、身分相當の必要ゟも非ざるものを、物數奇にて集むること少なからず。之を、簞笥の內に藏め置きて、使用することなく、夏秋に至りて、虫乾し、風通しする位ゟ過ぎざるは、不利益の事と思はるゝなり。久しき間には、染色の變ずることもあり。折目などの損ずることもあり。模樣の、年齡に適當せざる樣になることもあり。染色、模樣などの、時世の流行に後れて、縱、之を使用せんとするも、勢、使用す可からざるに至ることもあり、此等は、至りて見易き道理なれども、之を看破する能はずして、

只、其の品の奇なるを悦び、其の物の多きを貪り、時々、自、之を觀て、得意とするに外ならざる可し。此の如きは、所謂物數奇に非ずして何ぞや。若、其の物數奇の爲に費消する所の金額を、驛遞局、或は、銀行の確實なるものに委托して預け置かば、入用あるに際して、何時にても、之を引き出だして、新に、流行に適する衣服を調製することも得可く、多少の利子を增殖するが故に、品柄の佳きものを買ひ入ることも得可く、且、數多き反物を買ひ入ることも、得可きを、不用の衣服を、簞笥の底に埋沒せしむるときは、追々に、其の價を減じて、若、之を賣却せんとするときには、許多の損失を來す可し。是、豈、不經濟の甚しき者に非ずや。此の如く論じ來るときは、物數奇と曰へることは、善からぬことにて、一切禁止す可き樣に聞こゆれども、人の性質として、心を、物に寓して

樂しむことあるは、實に、止むことを得ざるものなる可し。男子にても、高尚なる樂として、詩歌を詠じ、山水を玩び、書畫骨董を好む類、一にして足らず、此も、亦、一種の物數奇には相違なけれども、之が爲に、資財を耗らし、業務を曠しくするに至らざる限りは、敢て咎む可きものに非ず。婦人女子と雖、物數奇中の、弊害なきものを擇びて、之を樂しむときは、必しも、閑暇無事を苦しむに至らざる可し。假如ば、讀書、詠歌、彈琴、點茶、挿花、盆石等の如きものも少なからず。此等は、許多の費用を要せずして、身分相應に樂しむことを得可し。衣服の物數奇の如きを、此等の物數奇中の一二に代へられては如何。

右に言ふ所のものは、婦人女子の欠點なり。能く〳〵戒愼しなば、其の他は、皆、長所なる可くして、恭儉、己を持することを得るに至る可し。果して、能く、恭

儉ならば、博愛、衆に及ぼすことを得るに至る可し。恭儉の心、盛なるときは、啻に、親戚、朋友に對するのみならず、一般の同胞に對して、之を、大切に思ふが故に、其の人を敬愛する念を生ず可し。是、則、博愛の、由りて起こる所以なり。博愛の念、盛なりと雖、己の衣服さへ足らざるが如きことあらば、其の實を擧ぐることを能はざる可し。一身を愛することを能はず。何ぞ、能く、他人を愛することを得ん。只、儉の道を守り、平居、一家の衣食、餘りある樣にして、後、初めて、愛を、人に及ぼすことを得可く、更に、餘りあること、愈、多からば、其の愛の、人に及ぶことも、亦、愈、博かる可し。勅語の御旨趣、其、或は、此に在るか。

女子敎育と婦德との關係（二）

黑河內與四郎

第一、神代より德川幕府創始に至るまでの女子敎育と婦德との關係

敎育の目的は、男女の別なく、其の智能を開發し、其の德性を涵養して、完全なる人間たらしむるにあり。蓋、智能の開發は、自然に、德性の涵養ともなるべきものにはあるめれど、亦、決して、智能を開發せりとて、強、德性を涵養せりとのみ云ふことを得ざるべし。本篇に於いては、智能の開發は、敢て問ふ所にあらず、只、德性の涵養と、否とのことゝこそう、其の主眼なれば、智能と、德性との關係は、論ずる必要もなし。さて、是よりは、更に、二期に分かちて概論すべし。

第一期、太古より王朝の中頃に至る

此の期に於いては、太古、即、神代と云へる時期より、王朝の中頃、紫清等の才媛輩出するに至るまでの間の女子敎育法と、婦德との關係を論述せんとすることとなるが、惜い哉、上世史は、簡單なるものなれば、女子の敎育法などは、極めて知り難し。されば、太古の女子家庭敎育法は、如何なりしか。予は、未、女子家庭敎育法として見るべき程のものを見當らず。されど、其の事蹟によりて、其の本源たる敎育法を推考せば、蓋、思、半に過ぐるものあらんとぞ思はるゝ。事蹟とは、事業行爲の外に著れたるものにて、紀記と書等に記載ある事實の謂なり。惟ふに、事實は末なり。末は、即、結果なり。結果とは、本源となるべき胤種ありて、其の果を結成せるものにて、近き例を以て云はゞ、子あれば、必、其の父母あるべき理と均し。子は、即、結果にして、父母は、即、其の本源たる

胤種なり。故に、子と云へる有形の事蹟によりて、其の父母あることを知るが如く、記紀二書に見ゆる事蹟によりて、其の事蹟を生み出だしたる本源を推考し得べきなり。依りて、予は、左に、其の事蹟を擧げて、其の本源たる女子教育法を推考せんとはするなり。

我太古史の中にて、女子教育中、婦徳に關する事蹟を見んには、伊弉諸、伊弉册二尊の御事蹟、並に、大巳貴命の正妻須勢理姫の御事蹟こそ、其の主なるものなれは、之を叙述し奉り、以て、當時の女子教育法と、婦徳との關係を推考する一助とせん。但、前に言へる如く、事蹟によりて、其の關係を推考するに過ぎざるが口惜し。

こゝに、諸册二尊、八尋殿の柱を巡り、左右より相會ひ給ひしとき、陰神伊弉册

尊は、陽神伊弉諾尊ゝ先だちて、「研哉可愛少男歟」と唱へ、遂に、夫婦となりたまひしに、其の子を生みたまふときに、奇怪なること、二度までもありたりき。依りて、此の事を、天照大神に申し給ひしゝ、そは、婦人が、男子ゝ先だちて揚言せしために、此の不祥をば致しゝなり。改て巡るべしと宣ひしかば、更ゝ、御教のまゝ〳〵、復、柱を巡り、相遇ひ給へる時、陽神、先、「姸哉可愛少女歟」と唱へ、陰神、之に和し給ひ、然る後、相共に住み給ひしかば、始めて、吉祥を得たまひしと云ふことは、古史の傳ふる所にて、太古に於ける男尊女卑の、實際に行はれ居りし著例として、何人も、異議なきことになん。また、八千矛神、即、大巳貴命（大國主神とも申し奉る）が、越の國に、妻覔ゝ出立給はんとせしに、嫡后須勢利姫が、夫の神に對して謠ひ給へる御歌に、

八千矛の神の命や、吾が大國主こそは、男にいませば、うち見る島のさきざき、かき見る磯のさきおちず、若草の妻もたせらめ、吾はもよ、女にしあれば、汝おきて男はなし、汝置きて夫はなし。

とあるは、貞德の貴ぶべきことを見る適例になん。今、此の御歌の大意を云はば、君は、男子にて坐せばこそ、數多の妻をも持ち給はめ、吾は、女の身にしあれば、君を除きて、外に夫はあるべきにあらずとなり。

以上に掲げたる二例は、世人の、常に引く所のものなるが、予が、特に、之を掲げたるものは、此の二個の證例に基きて、古代の婦德を論述せんためにぞある。されば、次號に於いては、之を基本として、其の婦德と、教育法とを論じ、漸次、下りて、中古の中頃にまで及ぶことゝすべし。

女子處世論

三輪田眞佐子

緒言

おのれ、曩に、女子要言と題し、足びきの山鳥の尾の、長々しき論文を掲げたりしが、其の主意とする處は、女子の、須らく知るべき事項を、悉、概論するにありき。由りて、今は、要言に述べたる如き完全なる女子を教育せむには、如何にすべきかと云ふ女子教育論を書くべきは、順序なりと雖、固、教育論の著書は、世に、頗、多き故に、今日は、論文の必要はなくして、實行の急務あるのみ。是を以て、おのれ、世人の、未、多く論せざる處を、茲に論じなば、反りて、諸嬢を益するならんと思ふ。加之、明治二十二年、朝野新聞が、女子教育の振はざる

を慨歎し、廣く、論文を、天下に募り、其の中より、三文を撰び、世間に發表し、以て、世を益せんとする美擧あるに當り、おのれ、手の舞ひ、足の踏むを知らずして、卑見を述べ、塾生某に筆記せしめ、某の名を以て、其の募に應じたりしが、僥倖にして、おのれの卑見も、撰の中に加へられき。即、第四千八百五十二號の該新聞附錄に、其の大略を掲げられたりき。されど、おのれ、自、筆を採りしにあらざるを以て、隔靴搔痒の感ありしのみならず、今日は、時と共に、おのれが愚見も、大に、其の當時と異なるを以て、不日、別に、考案を起こし、又、此の雜誌に載せんと欲すれば、それに先だち、世人の、未、多く論ぜざりし處にして、而も、女子の、心して講究すべきもの、即、處世論をしるし、諸孃の叱正を乞はまほしきなり。

抑、巍然として、雲際に聳ゆる山、千古變はらざるものゝ如く見えしも、一夜にして、萬丈の焰烟を吐きつる火脉に化せし例ありき。爛熳たる櫻花、いと美しくして、其の色、永遠易はらざる如く見えしも、一朝の嵐に逢ひて、無常の理を明すめり。あはれ、人生の變易、果なきこと、猶、之に勝れり。方丈記に、「行く川のながれは、絶えずして、しかも、本の水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとゞまることなし。世中にある人と、すみかと、また、かくのごとし。」とあるも、人生の新陳代謝を言ふに外ならず。香川景樹の、「唐土の虎ふす野邊にふく風の目に見ぬところおそろしの世や」と歌ひたりしも、人世の生存競爭を顯はしたるに外ならず。

特に、女子の世界は、言ふも哀れ、聞くも悲しき事多し。見よ、嬋妍たる女子の

裝は、芙蓉を欺くばかりなるも、さながら、沙羅双樹の花の色に似たり。いかでか、衰へぬ理やはある。否、古より、美を以て、世に處せんとする女子の、終を善くせし例なきこそ事實なれ。情深き父母の惠の露に潤ひて、蝶よ花よと、空々寂々として、歳月を送る小女も、其の樂は、春の夜の夢の如し。其の他、財寶も、心の憂を除く能はず。門閥も、心の樂を作る能はずして、人に知られで、袂を沾すもの少なからず。甚しきは、良人に棄てられて、南山の孤月に泣き、愛子に離れて、北流の草屋に住み、或は、赤貧洗ふが如くにして、梟鳴く枯木の下に、夜を明すものさへあり。されど、此等は、萬人中、僅に、一人の踏むべき災なれども、一般女子の免れざる憂は、良人の心に適はむには、如何にすべき。舅姑に孝ならんには、如何にすべき。兒子を育てんには、如何にすべき。家事を整へんに

は、如何にすべき。及、世間の人に交はらんには、如何にすべき等にありて、瞬時だも、其の身を離れざるべし。之を、慇然と思ひたりけん、白樂天は「人生勿作二婦人身一。百年苦樂因二他人一。」と歌ひたりき。嗚呼、女子は、斯の如き境界に立つものなれば、禍を轉じて、福となす處世法を講究せざれば、幸福なる生活をなすことの難き、天に登らんとするが如し。

されど、人世の不運のみを歎き、徒に、世を厭ひ、甚しきは、失望して落膽する如きは、唯、一身を誤るのみならず、將に、國家の大害をなさんとす。恐れざるべけんや。忌まざるべけんや。おのれが、以上ま、憂愁めきたる文字を述べしは、必竟、世路の難を說き、此の難き世路を、易く渡るべき自然の人道を尋ね、且、行ふに至れよかしと祈るが故なり。詳言すれば、女子の、世を渡るは、恰、小鳥の、

空を越ゆるが如し。されば、女子は、小鳥が、樂しき方向に飛び、弓矢の烈しき害を避け、鷹隼の猛き爪を遁れ、いと長閑なる春の日に逢ひ、百花、香を競ふ園の梢に捿みて、天職を盡くしつゝ、安心に、潔白に、幽雅に、且、高尚に、生涯を終ふるよりも、尚、優りたる生涯をなさゞるべからず。而して、其の方法を說明せんは、本論の目的なり。以下、處世に必要なる條件を論ぜん。

史談

鈴木のお子

鹽井雨江

人を愛するといふは、いかなる心を誠といふらむ。人におぼれたらむを、誠に其の人を愛するといはむか。私の情を擅にしたらむが、愛するといふ心ならむか。いないかでかは。誠に人を愛するといふは、さる汚き慾にはあらぬなり。人を愛す

るといふ事は、其の人のよかれめでたかれとのみ心を添へ、その人の恙なかれ榮えあれとのみ思ひかしづくが、誠に其の人を愛するといふなめり。猥りに私情を恣にしたらむは、淫のみ亂のみ、おぼるゝといはむのみ。新田義貞が、勾當内侍に戀々として離れかねたるは、誠に勾當内侍を愛したるにはあらず、これ淫のみ、おぼれたるのみ。楠正行は、辨内侍をいなみて受けざりしといへども、なか〳〵に誠に内侍を愛したるなり。内侍の身の、よかれ恙なかれとのみ思ふに、わが身はあすをも知らぬものから、受けではなか〳〵に悲しみを殘し、哀を増さむ事のいとほしさに、深く別れたるのみ。心の底を押しはかれど、なか〳〵に受けたらむにも勝りて、あはれは深くぞ見ゆる。げに、志か見ゆるにあらず、誠に志かあるなり。その人のよかれ恙なかれといとほしむが、誠の愛てふ心なり。いとほしむてふ心なり。悲しき人の亡くなりたらむを見て、歎くといふも、おのれがよかれ恙なかれと思ひたる人の、身に恙あり、長からずなりたれば、誠にかなしくぞ覺ゆなる。誠に人の亡からむ事の悲しきも、こゝにあるなり。これがゆゑになむ悲しかりける。いやしき物語などに諸共に桂川に身を沈め、あるは菩提寺に果てたる如き、世の人は愛とやいへど、お

のれは淫といはむのみ。かくては誠の愛にはあらじな。それにはあらで、今こゝにいはむずるのぶ子のごときは、誠の愛てふ心、いとはしといふ心、知りたらむ女子とやいはむ。

のぶ子は、何處の國いかなる里の人とは、定かに記したるものあらざれど、詳しくは知るよしあらねど、西の國の人なりとぞきこゆなる。山家といへば、よもぎが奥むぐらの下とおぼゆれど、花は何處もめでたかりけり。月はおのづからあはれなりけり。水は元より清らなりけり。あはれのぶ子、誠に田舍に生れぬ。田舍に育ちぬ、されど、花なりけり月なりけり水なりけり。姿貌あでにうつくしく、優にやさしく、あはれに澄みわたる、清くすゞしかりけり。容貌のみかは、姿のみかは、心も又しかありけり。花のごと月のごと水のごとありけり。敷島の道なども、あはれに心懸け、糸竹のしらべなども、ふしおもしろくしたりけり。

媒する人ありて、鈴木某といふ人にとつぎけり。そが妻となりては、又そが夫と朝夕のかたらひいとまめやかなりけり。起臥のかしづき、いとやさしく正しかりけり。夫は、青雲の志、立身の心深かりけり。人と生れながらに、世にたまく出でなが

ちに、むなしく僻土の草と生き、露と消なむ事を、限りなく口惜く思ひけり。都の天に出でゝ、高き道をも究め、よき分際にも昇らむと思へど、いとはしきはのぶ子の事なりけり。諸共に率て行かむも便あしく、獨り遺さむは、行くそらもなく、心にかゝりて悲しかりけり。とやせむかくせむとためらひけるを、のぶ子は、常にまめたちてかしづけるを、夫の心は、朝夕にくみてけり。させる夫の心、いかでおろそかに思ふのぶ子なるべき。一日夫に語るやう、男子にましませど、わが夫のみこゝろ、いとゞ道理に侍るになむ。妾も、すゝめ奉るになむ。妾の事は、ゆめ〳〵御心になかけさせ給ひそ。君が故郷の山、君が故郷の川、動かずありとだにきかせ給はむ程は、妾も又この山この家、この床に、かくてありと、君は思しめしてよ。妾もまた東の天の見なむ程は、君は彼處にましましてと、思ひ頼みて忍びてあらむ。別れ奉らむ事は、さむしなりとて、はてなき限りなき心地すれど、事もありけり、折もありけり、今は強に惜みてのみあるべき時かは。徒らに惜しむべき名殘かは。妾も心は赤きやまとの女子なり、あだなる色に、いかでそむべき。妾も神州の心は清く潔くはべり、何時の世何時か濁るべき。妾に心な置き給ひそ、妾あらむ限りは、此

の軒をも心にな懸け給ひそと、道理りわけてすゝむれど、夫なりけるも、いたく悦びけり。

夫れより、旅の用意なにくれと整へて、いよ〳〵都へ行く日となりけり。のぶ子はなほ旅の衣手、かにかくとかひ〴〵しげに心を添へけり。これを限りにあらざれど、流石に馴れにし袖、たつとしなれば、いと心細く、のうわが夫、別れ奉りては、今よりは朝日の光り、よそながら仰ぎ奉りなむ。思ふは入日のかげも、折りふしは心に添へてといへど、行く人も、又立ちかへりて、あはれ君に別れては、分けゆく道も、雲や迷ふらむ、時雨は降りまどふらむ。入日のかげは、思ひ暮して候はむ。朝日のたもとも、かへすぐ〳〵よそにな見給ひそと、ちぎりてこそは別れけれ。その日一日、のぶ子は、夫は今いかなる山や越え給はむ、さては何といふ谷を凌ぎ給ふらむと、軒にすがり門に立ち、ながめ暮してありけり。暮れては又心細さはあやもなく、いとも亂れぬ。今宵はいかならむ宿りやし給ふらむ、かなたもいかに淋しからむなど思ひつゞけて、夜一夜夢路は山を上り谷を下り、夫の行方慕ふに似たり。それより日毎に、曉きに起き、朝日のかげ出るを待ちて伏し拜み、三度の飯も夫と對ふがごと、朝

夕の起臥も、夫の諸共に在るがごとしてけり、夫よりも、恙なしといふ便り來りぬ。のぶ子も歡びをいひてやりぬ。都よりも屢々便りありけり。のぶ子よりも又問なく安否を問ひやりけり。四歳五歳は、都にも覺束なくてすぎけむ、故郷にも夢のごとく過ぎぬ。

四歳五歳すぎて、春のはじめ、軒端の梅咲きそめし頃、常には必ず、都よりまづ香を忍びたる便りあるに、その事あらず、いかにしつらむと思へど、此方より、故郷は軒端の梅も、なほ變るなしといひやりけり。されど返しあらず。花は徒らに咲き空しく散りぬ。おぼつかなく思ふ彌生の暮、やうやうに便りありけり。都の方にては、花の盛り。今日も昨日もあこがれてのみ。故郷の苔ふかき花、心にとむる隙なくてとの音信。常の心には似ざる節なりけり。のぶ子は何と讀みけむ、いかに思ひけむ、故郷の花にな心置きたまひそ都の花世におくれぬ香こそ、妾も陰ながら願ひなれといひて、かへしやりぬ。

月日移るまゝに、便りは隔りけり。花に月に事問ふ天も遠くなりぬ。はては玉章の無くて過ぎつる春秋もある事となりぬ。のぶ子よりは、折りふし起臥をとへど、怨

みたる言葉は更にもあらず、あやしむ心も絶えていはざりけり。唯そのきはも進みゆけば、おほやけの務めの益重くなりつらむ、事しげき心遣ひ、身命に障らむ事のみ、心に懸けてはいひやりけり。心の晴れなむすさび、身命に障らぬ慰みは、是非に忘れなしたまひぞと、朝夕の心添へなど、文の便宜に、まめやかにいひやりけり。げに唯其の夫の恙なかれとのみ、御命のながかれとのみ心を盡しけり。斯くてありけるに、一日のぶ子の伯母なる人来りて、のぶ子につげけるやう、和主はいまだ知らずや、なれの夫鈴木主は、都に在りて今は位も家も人に恥ぢず時めきてあり。世にもてはやされ給ふより、和君の事は忘れてなりけむ、みめよき異妻をさへ迎へ取りて、楽しき世をば送るときく。和君は未だ知らずとは、いとはしき事の限りなり。いつまで斯くて故郷の床を守らむ、和君こそ誠の妻なれ、早や〳〵都へ上りて、行きて怨みたらむがよけれと教へけり。されど、のぶ子は露ばかり歎きたらむ色もなく、恨みたらむけぶりも無し、夫なる人の志を立てゝ、この故郷を離れける時、この軒に心残りげに侍りしを、おのれも女子とて、やまとの人の心は持てり、おのれ斯くてあらむほどは、この故郷の山と共に、此の軒は固く守りてあらむ、心な更に

置き給ひそと契りてなむ、此所には斯く殘りける。なれど、其の人の志成り給ひしとて、此の郷に歸り、此の家には入り給はむまでは、此處をえ捨てじ。此處を捨てなど、先に必ず守らむと契りし言葉を、われと仇に散らし侍るなり。契たる故郷の山、故郷の川、ありつる形は、猶其の折りに變らず、彼處に見え侍る。妾も如何で變るべき。殊に都とはいへど、なれぬ他郷の旅ね、妾のあらむには、よしや足はぬ者にしわれどとて、朝夕のおんかしづき、心ばかりは添へ奉らむものを、妾もあらで、旅いかどかり起臥に便りなく、出入りにたづきなく、事欠き給ふ事も多からむと、の衣手裁縫のいとまなく、心に懸りて侍りしが、かしづきさへ迎へ給ひしとあれど、さるかたの便りも出で來にけむ、よろづに事欠き給ふ事もなくてあらむ。朝夕のかしづき、心づくしも必ず深からむに、暑きにつけ、寒きにつけ、今よりは稍々命のうしろやすき心地して、なかなかに嬉しき事を聞てけるかな。恨みもあらじ、悲みもあらじ、何にまれ、我夫恙なからむ便りにだにあらば、妾の願ふ事にあむなり。妾行きたりとて、夫に恙あらむ事あらむには、これにましたる悲しみはあらじといひけり。誠に夫をいとほしむ心も深き一言に、伯母はかへす言葉もなく、唯いひつ

る言の、われながらなつかしさに、多くもいはで歸りけり。

斯くときかば、あだし女子らは、飛びてもゆきつらむ、狂ひてもゆきつらむ。されど、のぶ子。更に恨みはあらず、恚りもせず。唯伯母の歸るを送りて、はし近う出で、折りふしかき暮したる五月やみ、たま／＼晴れわたりて、月の雫こぼるゝばかり、清くすゞしく澄みわたりたる大空、のぶ子はつく／＼と詠めて、何となく露しげき氣色なりしが、久しく床に捨てられたる琴取り出で、想夫憐とやらむいふ歌、いくかへし／＼、かきならべけり。夏の夜のいつしか更けわたり、月も落ちかたに傾かむとして、何處へ通ふらむ夜深きに、頻りに鳴きて過ぎゆく時鳥。のぶ子は、さすがに堪へずなりけむ、又端近く出で、つく／＼とながめしが、思ひあまりてか、琴の邊りにふし沈みぬ。時鳥の聲、絶え／＼に聞え、木の葉に含む露の、折りふし凪に、はら／＼と散る音のみきこえしが、やがて思ひかへしてか、筆取り出で、

都路につきは照るやとよもすがら
なきあかしてむやまほとゝぎす

と書きて、都の天へ送りやりぬ。げにこそあはれなりしか。夫も未だ人の心は忘れ

ざりけり。今更にいたくあはれに思ひて、日頃の志を詫び、迎へ取りて、正妻となし、昔二人の故郷にありける日にもまして、むつまじくなりにけるとか。あはれのぶ子。誠に夫を愛む心の鏡ありけり。夫の志を知りて、獨り潔く殘りて、夫を勵ましたる、情輕きに似て輕からず。唯夫のよかれとのみ思ひし心の誠なれバなり。又夫のつれなき心をきくも、更に態くけしきなく、恨みたるけぶりなき、情なきに似て、なか〳〵に情ふかきなり。唯夫のよかれつゝがなかれと思ふ心の切なるが故なり。誠の愛てふ心もてるがゆゑなり。そはこと〴〵にいはずとも、夫に誓ひたる一言、夫のゆるしあらずでは、此の軒はね捨てじといひし一言、妻てふ操はいひつくして餘る方なし。あはれのぶ子。誠に正しき妻なりけり。これぞやさしき愛情の限りなりけり。これ讀まむ令孃たち。この愛この心を、深きみ心に、くみたまひてよ。

孝婦春が事

蒲城　弘

春の日の永きに、弟妹ども打集へ、古今の史談にひかげを移しけるうちに、信州の

孝婦の事實のいとも目出たきがあれど、こを記して、貴社に寄せつ。

春は長野縣伊奈郡上飯田村の小林平四郎といへる農民の妻にて、その性質、いと温和柔順にして、夫、姑に事へて、能く孝貞の道を盡せり。家固より富めりといふにあらぬに、男女すべて八人あり。その衣服より飲食其の他の家事ども、春一人にて、こを調へ治むれども、姑至りて、愛情うすくして、これを遇すること、まことにつれなく、あさましきこと多し。その夫もあはれと思へども、せんすべなくて、最早、離婚をせんとまでに至りしが、姑、遂に、中風病に惱みて、その起居さへ不自由にて三度の食事をも、自、なすこと能はず。春は、ひとり、こをまかなひて、その好むものなど、つとめて調へ進め、ひるとなく、夜となく、あるは、採み撫などし、或は、廁になどかよふをりよは、こを助け導びき、いと懇にぞ奉養したりける、その年月殆、十年に及びしなりとぞ。かゝれど姑の心も、自、和ぎ、其の後は、いとむつまじく、家の中、能く治まりしとぞ。春の心ざまの、優くまめやかなること、實よ感すべきことにこそ。

家政

看護法捷徑（三十五）

三笠舍主人

第四編　常に多き病の心得方（續き）

（十二）癤

一　皮膚の一部、赤色を呈し、焮腫して、硬く、痛みありて、纔に腫物の深部、膿潰するものを、癤と云ふ、硬結したる赤色部の中央、微に黄色の小點を顯するは、既に膿潰せる徴とす、此時に至れば、痛みは少し輕くなるものなり。

二　癤を生ずる時は、温罨法、又は巴布、（共に前編に出づ）を腫物の上に貼するを、通例とすれども、到底、消散せしめ難きものなれば、速に醫に乞ひ切開して、膿血を漏らすを良策とす、切開は、成るべく切口を大にして、膿汁の流出を十分ならしむべし、切口を小くし、腫物を強く壓して、膿汁を押し出すは、宜しからず。切開して後は、創部を清潔に保持すべし、さすれば、治癒意外に速なるものなり、若し創部の取扱方、不十分にして、清潔ならざるか、又は他部の皮膚に、膿汁着

く時は、更に其部に瘍を生じ、又は最初發生したる瘍の、治癒を妨ぐ、故に切開したる創面は、極めて清潔に保つ事、肝要也。

三小き瘍は、切開せずして、其儘になし置きても、焮腫は次第に消散すれども、膿物の中點に、少なる硬結を遺し、其深部には、多少の膿汁の塊りを、殘すのみならず、再三再四、其近部に、同一の瘍を生じ易きを以て、少なるものと雖、之を生じたる時は、最初に切開して、十分膿汁を漏らすを良とす。

（十二）瘭疽

一瘭疽とは、指に發する、一種劇性の焮衝を言ふ、（稀れには手掌に發するもの有。）多くは、皹裂、又は他の些細なる指の、創面より、汚物の進入するより、與るものにして、最初は、格別の障害を覺えざるも、乍ちにして、烈しき痛を發して、苦痛堪へ難し、速に治療を施さゝれバ、病機忽ち骨に及びて、指節腐落し、或は膿潰蔓延して、腕に及び、劇熱を興し、甚しきは、命に係るに至るもの有。

二此病を防ぐには、皹裂其外指に微創を受し時は、其部を清潔にして、汚物に觸れしめず、己を得ぬ時は、單軟膏、其外油質のものを、十分創面に塗り、清潔な

る繃帯等にて卷きて、事を執るべし。已に本症を興し來る時は、速に醫の治療を乞ふべし。疼痛を緩解するには、溫湯、又は溫石鹼水中に、頻に患指を浸し、且絕へず、患肢を高位に保つべし。

(十三) 鷄眼

一 木履又は靴の、不適合によりて、足の皮膚の一部に、斷へず摩擦、又は壓迫を受るに依りて、生ずる症也。之を防ぐには、木履、靴の不適合なるものを、忍びて長く用ゐるべからず。

二 鷄眼を生じたる時は、絆創羔の中央に、其鷄眼を容るべき、大さの穴を作りて、患部に數枚重ね貼し。又は綿の小環を作りて、貼すべし。共に長く續けて貼し置く時は、壓迫を防ぎ得る也。又鷄眼を除き去るには腐藥を用ゐて、腐蝕せしむる法、又小刀を用ゐて、硬結せる皮膚、及核子を、除き去る法あり、此れ等は、醫に依賴すべし。

漫録

あらずもがな（第三）

塩井雨江

(五)女子の立居振舞靜ならず、ものさわがしきは、見わたる大空に、浮雲のゆきかひ、たち騷ぐよりも、渡る舟路に大波の漲り立つよりも、なほ一入おぼつかなき心地せられ、あらずもがななり。父母にものいはむずるに、かしこまりもせず。立ちながらよものいひたる、斯くても人なりや、女子なりや、あやしき事になむ。あるは、さつと起たて、坐り、疊の隈どつと動きたるなど、令孃の袖もなか〳〵に塵より汚き心地す。あるは、書齋の机によりかゝりて、折りふし、大なるあくびして、窓前の小鳥を驚かしたるなど、心なき鳥はいざ。心ある人は、驚きて魂も消えむ。欠伸は、おのづと出るもの、さまで咎めずもとあらで、さてもおかなむ。え謹めぬを、をかしと笑はむのみ。若き女子の、やさしげなる聲にて、あはれなるうた、やさしげに詠みたらむは、誠に謂にうつくしく、鬼神の心もやわらぐることわり見ゆれど、あやしくむづかしき顔して、むづかしき唐詩など、むづかしげに口ずさみたる、さる女子こそ、明日といはず、けふ今、唐へやらひやらまほしき心地す。殊に若き弟妹など、何事か泣きまどふを、見もかへらず、詩吟じたる、さらむ令孃は、一日も此の玉鉾

の道ある國には、え退かぬえ住まむ人ならむ。ましてや、赤子の聲かるゝまで泣き沈むを見もかへらず、唐歌など詠みたる、唐人とかいふ國とて、いかでか悦ばむ。かゝる女子を、妻といひ妹背といひて、得意顔なる學者ありときゝては、げに澆季の世も限りなきかな。襖の開閉に柱を叩くばかりの音たつる、あるは俄に物取りよせむと、坐敷を走りて、床の懸物ざわ〳〵と動かしたるなど、あるは、侍きの女の童が爲じたる事、氣に入らぬとて、折角心を盡くして爲しゝものを、取りこわし、かき亂したる、或は、わけなきことに、怒りてのゝしりたる、あるは、いやしきはした女と、端近くまとひして、いやしき話て笑ひどよめきたるなど、いづれも心の底の淺はかなるも見え、奥ゆかしからず、あらずもがななり。余念なげに讀みたる書物を、俄にかひやり、筆もてる手をうちふりて、或は突然衣縫ひたる手をとゞめ、針もてる手をあげて、一二三など、聲かけて体操のまねなしたる、風癲病院に入れまほしき心地す。おのれ今様の小學にて、女子にも體操を教ゆるは、誠の女子の教の道なりや、さあらじと思ふ。

裾をかへし袖を振りて、驅り狂ひたる、おさなき女の童ならむ、去かもあらまほしけれ。月ならむ十六夜、花ならむ彌生、はづかしきばかりの令孃が、黑塗の駒下駄を空さまになし、わきて、けもの、足に似たる靴など踏みならして、驅り狂ひたる、いかならむ山より、いかならむ谷より、狩

り出されし野獸ならむ。淺草の奥山に、繫ぎて見せまほしく思はれて、あらずもがななり。

女子の花の立枝折り取りたる、いかばかりつれなく、猛くあさましく、あらずもならむ、限りは更にあらず。女子は心飽くまで深きが、よきなり。心飽くまでやさしきが、よきなり。さるを、あはれなる花の枝など、むざ〳〵と折りたる、むごく情なく、あはれ知らず、身も世もあらぬ思ひす。外つ國にありときく、人喰ふ人、それもものかは。數ならぬ心地す。

今様の人は、女子のはしるを見、飛ぶを見、踊るを見れば、あはれいみじや、活潑が十九世紀ぞ、いさましきが新天地ぞとはやす、誠にあやまてり。いなあやまてるにあらず、たわけなり。飛びつ、はねつ、駈りつ、狂ひつ、けものゝ如きさまするが、いさましきにや、活潑なるにや。さらば、淺草の輕業師の女などは、最いさましく活潑なるものならむ。世の中の人は、兎角に置くべき本をあやまてり。何事も皮想の見は、あらずもがななり。人の本とすべき所は、げに心が人の本なり。身體は形のみ。よきといふも、かしこしといふも、あはれなりといふも、うつくしきといふも、かなしといふも、皆心をいふべきなり。活潑といふも、いさましといふも、又心をこそいふなれ。心のものに潔よく、道におくれざるを、誠にいさましといはむ、活潑といはむのみ。されば、よしや其の姿其の行、なよ〳〵として、若竹の素直にありとも、よしや順々として、柳の糸の柔しくありと

も、心だにものに潔く、道におくれずあらむ、誠にいさましといひ、活潑といふ節あるにこそあなれ。猥りに飛び狂ひ、駈けあらびたりとて、勇ましきにあらず、活潑といふものには非ず、かてゝ人の道にはおくれがち、もの事には潔からずありては、唯に荒くれ女子亂暴令孃といはむのみ。

（未完）

道のゑをり歌合（八）

久志本常幸寄贈

つかふ道やもゝの司も鈴のつなの
たゞ一すぢよこゝろひくらん

松ねはふやまの岩手をゆくこまの
つまづかで世に仕へてしがな

つとにおきよはにいねて、務むべき道をおこたらず、ひとすぢよ、心をつくして、君のめぐみに報ゆたてまつらんことをおもふべし。さるにても、みやづかへの道のけはしきならはし、敬愼勤の三もじを、紳に書し膺に服て、なほざりにすべからず。

つかへこし身は下ながら我みちの
名をや雲井の代々にとゞめん

水上のすめるをうけてゆくみづの
すゑに濁れる名をばながさじ

汝の祖をおもふことなからんや、その德をのべをさめよと、からうたにもいましめはげましける、不忠不義のおこなひして、父母先祖までの名をけがすは、世にあさましき事のかぎりなり。

人の子のおやになりてぞわが親の
　おもひはいとゞ思ひしらるゝ
たらちねの心のやみをしるものは
　子をおもふときの涙なりけり

父母の、我をはぐゝみたて給ひしいつくしみの恩のかぎりなきこと、まことに天よりも高く、地よりも厚し、いかゞしてかは、これに報いたてまつるべき。ひたすら孝心をつくして、なにとぞ萬分の一をも報ずべし。しかるに、世に人の子の孝行ならざるは、親のめぐみをおもはざるの淺ましきなり。みづから子をもちて、げにおやのなさけの淺からざることをおもひしるべけれど、いやましに、孝心あつかるべきものなるに、かへりて、いとゞ不孝になりもてゆくものもあるは、いかにぞや。孝は妻子におとろふると、いにしへのいましめ、さることぞかし。人人、子をおもふばかり、親をおもはゞ、世に不孝なるものはあらざらましを。

あはれまんと思ふ心はひろけれど
　はぐゝむ袖のせばくもある哉
あまたにはぬひかさねゝどから衣
　おもふ心は千重にぞありける

親の子をあはれむ心のわりなさは、身にかへてもと思ふばかりぞ。されば、おやのものし給へる御心をくみて、いと有がたきことに思ひ戴くべし。むすめごゝろのあどなきまゝに、家の分をもわきまへず、何くれと、むさぼりねがひて、親のあてがひをうらむことなかるべし。

知るらめや子を思ふやみの夜の鶴
　わが世ふけゆく霜になくとは
峯たかみ子を思ふ道は木がくれも
　おぼつかなしやましらなく聲

おやの我をおもひ給ふ心をおもひしりなむ、身をつゝしむこと、おのづから深からでやは。また、人の子をめしつかふにも、此心していたはらざらめや。

戀しなん後はなにせんいける日の
　ためこそ人は見まくほしけれ
今ぞしる苦しきものとひとまたん
　さとをばかれずとふべかりけり

おやの子をしたふ心ばかり切なるものはなし、なりひらの朝臣のはゝ、長岡に住侍る時に、なりひら宮づかへすとて、時々も、えまかりとぶらはず侍りければ、母のもとより、よみておくられける「老ぬればさらぬ別もありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな。」されば、親の膝下を離れゐるもの、此心をおもひやりなむ、老のよはひの殘りずくなになれるのかなしく、日を愛むの誠おのづから切にして、しば〳〵見まひ訪づれて、老の心をなぐさめでやあるべき。もし、なほざりにこゝろえて、おろそかにうちすぐしなむ、なき跡の悔いかばかりならむ。

別れにし程をはてともおもほえず
　こひしきことの限りなければ
けふ迄もながらふべしと思ひきや
　別れしときのこゝろなりせば

いづれもむかはりの服はてゝよめる歌なり。孝心追慕のふかきこと、いひやらん方なし。いかに、情うすきものも、これらをうち誦じては、あはれに感じていたまざらめや。

かぎりあればけふぬぎすつる藤衣
　果なきものはなみだなりけり

藤ごろもなど一とせとかぎりけん
　これ計りこそかたみと思ふに

いづれも、むかはりの服はてゝも、なほ、戀しさの盡せで、いつをかぎりともなく、慕ひおもふこと、むかしの人はおほむねかくありけらし。さるに、今世のならはしは、わづかに五十日の忌すぎぬれば、やがて、うちわすれて、思ひも出さるさまなる代、いかなるうすき心にか、いぶかし。

たらちねのありし其世に哀など
　思ふばかうはつかへざりけん

昔だにむかしと思ひし足乳根の
　なほ戀しさぞはるかなりける

あらかじめ、なき跡の悔しさをおもひやりなば生前の孝心いとふかゝるべし。肉をまうけて墓をまつるは、ありあふ品の生る日におよぶにまかずとなん、いにしへにもいましめける。父母います時、これぞと思ふ孝行をも盡さで死後に膳をそなへ香をたきて風木のいたみ泣さけびても何のかひかあらん

我ながらわれもなつかしなき人の
　わきて殘せるかたみと思へば

異とてはゞ、みたてしいふしへは
　世をそむけども思はざりけん
此身は、父母の遺體なれば、われながらはしいまゝにすべきものならず。つねに父母の心を心として、あやふきに近づかず、おぼつかなき事をせざるべし。いはむや、まさなき行などもしいでゝ、あさましく此身を辱しめ、けがしなば、なき人の、草葉のかげより見そなはして、いかばかりうらめしく悲しからん。うまれしより人と成まで、いと大切に、やごとなき珠のごとくにいつくしみそだてられたることを、おもひめぐらせば、いと〱、此身の有がたき事、おもくつゝしみ守らでやあるべき。
たらちねのありて諫めし言の葉は
　なき跡にこそおもひしらるれ
教へおくその言の葉を見るたびに
　またとふ方のなきぞかなしき
父母のをしへをうけたまはるたびごとに、かならず、此歌をおもひいでゝ、まめやかにまもりおこなはゞ、後の悔すくなかるべし。
或時はありのすさびにかたらはで
　こひしきものと別れてぞしる
なき人をおもひ出たるゆふぐれは
　恨みしてぞくやしかりける
世にはらからのあはひなど、あだ〱しくおろそかなるは、さはにおもふがゆゑなるべし。あめがしたに、幾千萬の人のうちにて、わづかにかぎりある兄弟なれば、いと大切にせでや

あるべき。まいて、父母のうへをや。不足がましきことなどいひて、老の心を痛めんは、なき跡の悔しさ、はらわたを斷にたへざるべし。

君なくてなに身かざらん櫛笥なる
　つげのをぐしも取んと思はし

なきひとは音づれもせで琴のをゝ
　たちし月日ぞめぐり來にける

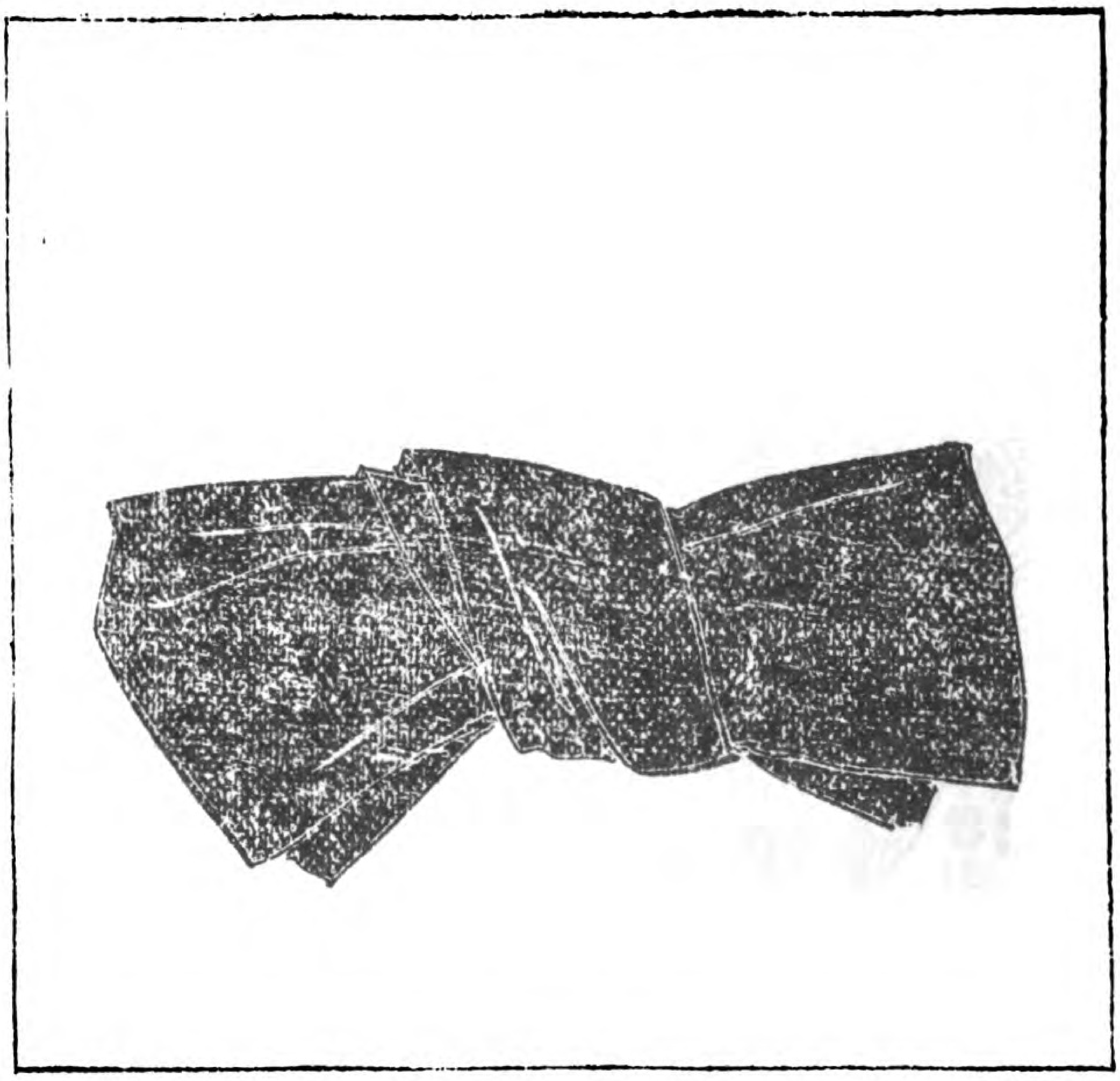
夫のるすを守るに、なまめいたるよそほひ、にぎはしき物の音など、つゝしむべきことなり。まいて、未亡人となりたる身の、髮かたち衣裳のさま、いと〳〵つゝしまでやは。絲のしらべのごときも、服はてゝ後のつれ〴〵には、しめやかに、憂を遣なんは、にくからじ。かごとがましう聞えんは、あしかるべし。さるにても、さうのことは、女のものやはらかにかきならしたるつま音、けしうはあらず。さみせんといふものは、聲の淫亂なるは、いふもさらなり、これをひくさまのいやしさ、見みぐるしく、げにも物もらひうかれめの手すさびにて、いとけがらはし。さふらひのつまむすめたるもの丶、かりそめにも手ふるべきものならず。さるに、近ごろの世は、やごとなき家々にもなべてもてあそばるゝことになりけるは、いかなる淺ましきならはしにや。つひにはむすめの子のかならずまなぶべきものとして、これをしらざるは、かへりて恥ることにぞなりぬ。くだれる世のあるびれゆくさま、うちなげくに餘りあることなりけり。

井蛙小錄

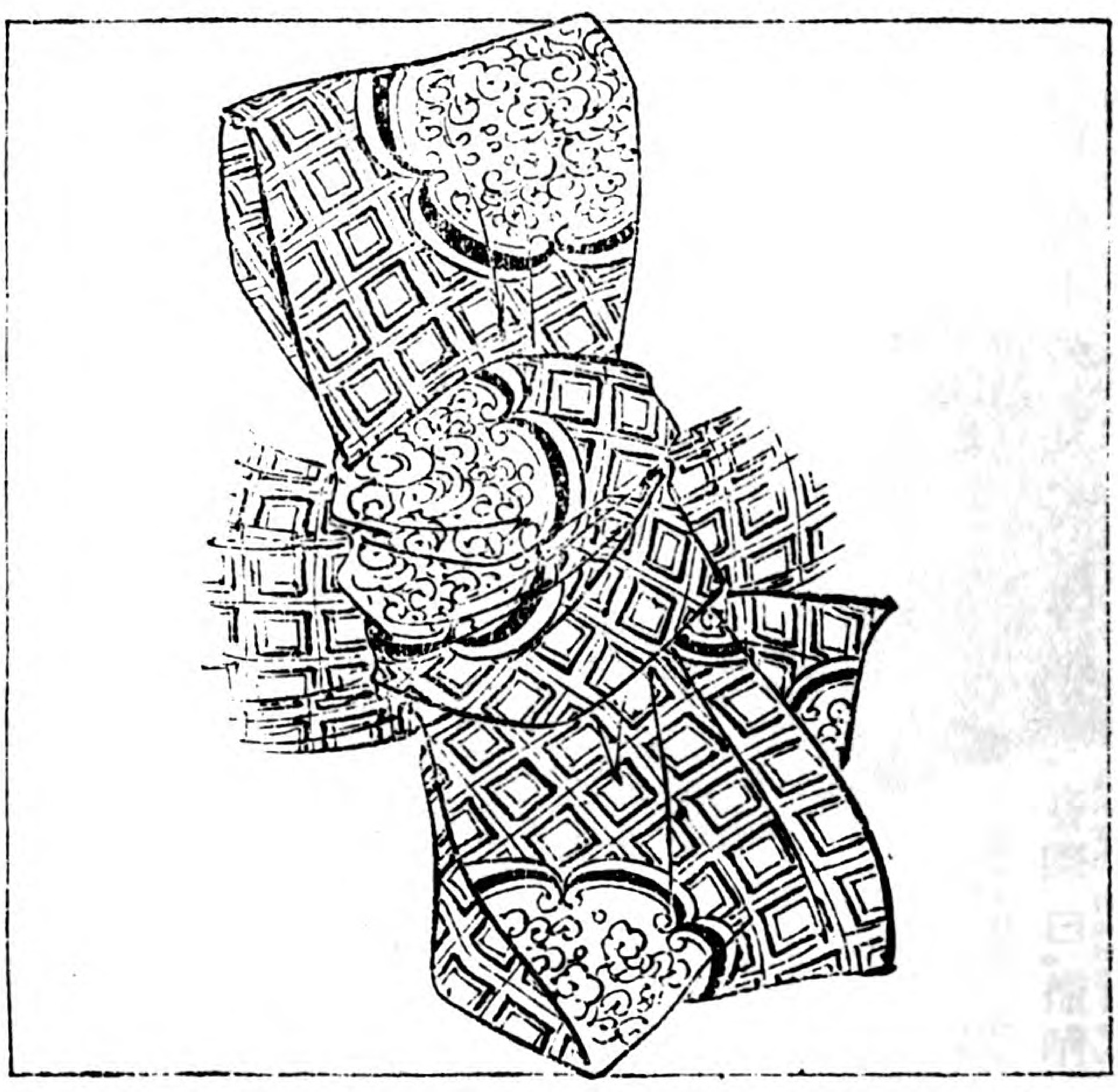
井上頼文

帯のむすびかた(承前)

小まんむすび



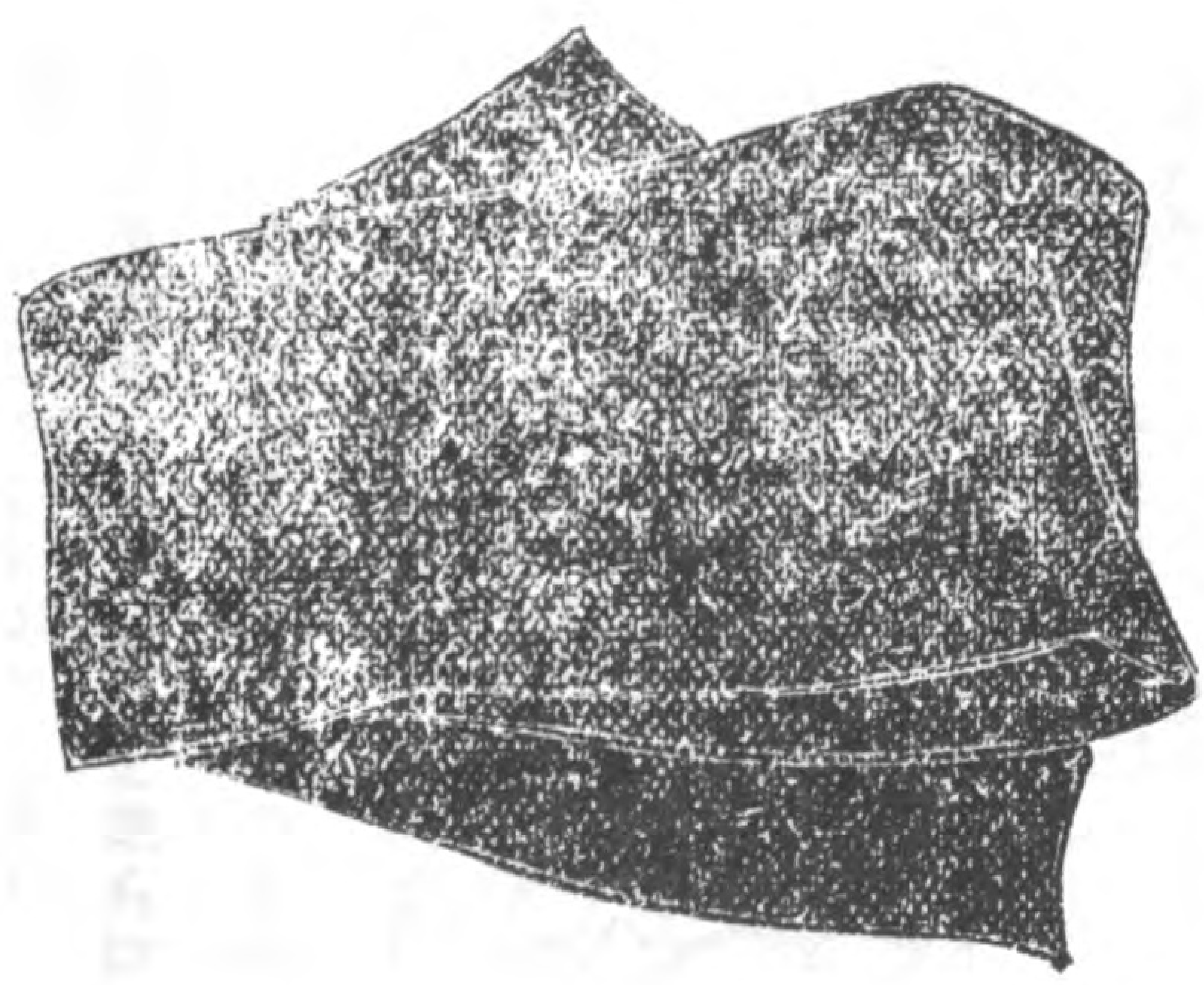
立結



島原結び



一つ結び



てり〱坊主

小山田與清

浴にてり〱ばうしとて、紙人形をつくりて、晴を祈ることは、こゝにも、かしこにも、やゝ、はやくよりせしわざと見ゆ、蜻蛉日記下卷に、「今日かゝる雨にもさはらで、おなじ所なる人ものへまうでつ、さはることもなきにとおもひて出たれば、或者、女神にはきぬ縫てたてまつるこそよかなれ、然し給へとより來てとゞめけば、いで心みんとて緋のひゝな衣みつぬひたり、したがひどもにかうぞ書たりけるは、いかなるこゝろばへにかありけん、神ぞ志るらんかし、「しろたへの表御神ゆづりてんへだてぬ中にかへしなすべく」又「から衣なれにしつまを打かへしわがしたかひになすよしもがな」、「なつ衣たつやとぞ見る千早振神をひとへに頼む身なれば」云々。帝城景物略下卷春場部に、雨久以白紙作婦人首、剪紅線紙衣之、以苕苗縛小帚令携之、竿懸簷際曰掃晴娘云々。該餘叢考卅三卷に、呉俗久雨後、閨閤中、有剪紙爲女形、手持一帚懸簷下、以祈晴、謂之掃晴娘、按元初、李俊民有掃晴婦詩、卷袖搴裳、手持帚、挂陰空便搖手、其形可想見也、云々。

（擁書漫筆）

草根集（つゞき）

文月ばかりつくしより友だちの許へ

やう〱吹風の身にしみ侍るにも、都の戀しさのみやるかたなきに、をりをわすれぬとはつ人も、

いとゞもよはしがはなれど、其つばさにめつてまはしうてなん。げにこぞのあき山崎にて別れまゐらせし、朝霧のまよひは、今だにかきくらすこゝちして、きのふけふとのみおぼえ侍るを、心づくしの月日も、はや一とせになり侍りにけり。いでや、いまゝで、いきの松ばらの名をだにとはせたまはねは、さやはちぎりしと、心うけれど、雲のうはがきたゆるにつけても、御有さまのおぼつかなくて、いとわつかりしほども、いかに〳〵とぞ、おもひわたり侍し。こゝには、たゞ、今よりのちの三とせのあまりをだに、ことなく過なむ、空行月にたのみをかけて、鏡の神をいのり侍りても、故郷人の心をぞえしり侍らぬ。されど、をさなくより、はらからのやうにて、むつび奉りにしかど、されどもおぼし出る事もなどかなからん、たゞめかるれば、うときうき世のさがこそうれたけれ。さるは、

みやこまでふきもかよはゞおもひやれこゝろづくしの神の秋かぜ」、旅のすまひにしほたれ侍るは、御おしはかりにも、あまりてなむ。

葉月の末やむごとなき御わたりにをり〳〵まゐりなれ奉るひとのもとへ女どちの中より

きのふは、久しうて、まうのぼりたまひしかど、よもしねさふらひたまふべくとこそ、おぼしめしつるを、などていつよりもいそぎ物したまひけむ出たまひつるのちこそ、ふり侍の月はさしのぼり侍りしが、ふけゆくまゝにさえまさりて、露のお

ら玉も、ひかりもてはやされて、ひもときわたる花の色々、ひるよりもげにをかしきを、御らむじわかしたまひけるにも、とくまかで給ひしことをぞのたまはせし。わたくしにも、いとくちをしうて、こよひ御ふるさとにて、またすしもあらぬ人もぞ侍るらんなど、これかれ、聞え侍りき。さるは、御ちゝぎみの、一とせにんより登り給し時、根こしておはせし宮木野のはぎ、げにいとことなるよしきこしめしおきて、わりなくゆかしからせたまふを、咲侍らば、一えだみせ奉りたまひてんや、きのふもおほし出つれど、かゝることには、おほやけをだにいなみしひともあめれど、そこの御心にまかせがたからむ時、いとはしうてとなむのたまはせし、鹿のねなからだにも、ねがひ侍るを、これは、たゞ、露にをれにしさ枝にても、いとこそ興ぜさせたまはめと、おもひたまふれど、うちうちにて申侍也。なほゆるしたまはずど、あなかしこ、おとなくてやみ侍りぬべし。

長月九日めのとの賀し侍るがもとへ

けふのいはひは、こゝにてとこそ、かねておもひつるを、何がしのあそ、いときやうふかきめしにて、さまざま、いとなみつかうまつらるゝよし、聞侍りしかど、ことのこゝろざしをたがへんも、心なきやうなれば、また、後にたりたまはんをりにこそと、こたみは、ゆづりきこえ侍りき。例の調度ども、あかぬことなくつくし給ふめれば、こゝには、寺々にてすきやうをぞせさせつるを、たたにやはとて、かざしの臺けしきばかりなれど、

かたつかたには、前栽にさけるも折そへて、これにぞくわんすをむすびつけ侍る。けふしも、この花に、老せぬ秋を契りこめたまへれば、した露のおちとならむまでもと、いはひ聞ゆるしるしになん、なつふゆのさうぞく十二ころもはこつくゑなども、れいのめなれたるさまなれど、ことさらに、白きあやのおほひをせるは、千とせふる鶴のけころもによそへ侍るなり。かくはくゝまれ侍りて、いとゝふりにし事は、あさからずおもひしられぬれど、かゝるをりにだに、とりわき心ざしを見ゆるかりのふも、えあらぬこそくちをしけれ。

かの折らへたるきくにまゆひきて、総すそむすびつけたり、そのつゝみがみに

長月のながくと人をいはひおきて
おなしかざしにそれるしら菊

また

かぎりなき秋にかざゝむ人のため
霜にもあてぬしらぎくのはな

○主の仇を討ちし下女

（かたらひ草）

大久保家の奥に奉公せし女中老、ある時、心得違の事ありしを、女の年寄大に怒り罵りて、打擲に及びぬ。かの中老ひとり言に、これまで親にも擲かれしことはなきものをと、いひつゝ、部屋に歸りて、文を書て、下女二人にもたせ、親のもとに遣りぬ。一人の下女申すやう、一人は主の側に殘りなんと云を、大事ことをいひやる文なりとて、強て二人とも出しやりぬ。道すがらあやしみて、常に

二人とも一度に出さるゝ事も覺えず、且、顔色もたゞならずありしとて、竊に文をひらき見るに、しか〳〵の仔細にて自害するなりと書のせたりければ、さてこそあるべけれとて、一人ははした使にとく行れよ、我は歸りて止むべしとて、急ぎ歸りて見るに、はやく自害してありしかバ、死骸には夜のものうちかけて、小脇差の血を拭ひ、わが、懐にさして、さあらぬ体にて、年寄の部屋に行き語り申度事の候、唯今部屋に來られよといひしよ、程なく徃くべきなりといひけれど、歸り、又、行て數度に及びしかど、年寄何心なく來りて、夜の物をかいやれど、朱にそみて中老は死したり。その時、彼下女、これは今日の事にて、かくは自害におよびたるなり、主の仇よといひもあへず、脇指をぬくより早く刺殺しけり。かゝれバ、兩人を殺したるにやとの疑かゝり、捕はれて糺し問るゝとき、懐より文を取り出し、證據はこれにて候と、始終のやうすを、つまびらかにいひ述て、主の仇をぞ打留め、おもひおくこともなく候とて、騒ぐ色もなかりしが、なほ、大守女中どもを、殘らずならべ、彼中老の下女の事いかゞおもふやと尋させらるゝに、忠義といひ、健氣なることゝいひ、歎き入りたるよし、口をそろへていひければ、さらバ、いかゞせん、おの〳〵存ずるむねあらば申べしとありしに、いかに存よりもなしと申す、さらバ、此度のはたらき譽るに言葉なしといはん、今年寄死して事かけぬれど、即、年寄に取り立てしかるべからんとて、呼出して賞を行はれけると

ぞ。

按ずるに、此條は、鏡山といふ淨瑠璃の謠ひものに作意せし、草履打といふ事は、これやその本據なるべしとぞ思はるゝ。

忠孝二筋道

其一

渡部乙羽

小牧關ヶ原の一戰に、天下は麻の如く亂れたれど、德川家康は實に其中の遂なりしか、入道の豪傑は風のまに〳〵靡きて、直なるはこれ關東の一名木、江戸に根城を構へて、枝葉を四方に茂らしつ、雨わるも風わるも、いツかな倒るゝ樣は見えず。斯かれど大坂方は散々にしなされて、秀頼は自滅し、三成は四條磧に首を梟けられて、鴨河の水に映つる月影の青白きを、無念に嚙みし前齒に浴びて、往來の人に身を晒はせぬ。さる程に石田黨の統領たる浮田秀家も、死罪に處せらるべきを、島津宰相が辭を盡しての哀願により、一等を減じて、秀家父子を波路遙けき八丈が嶋へ流罪とこそは、事落着しけり。

秀家斯の如くなれど、召仕の老若男女は、我先よと遁げ隠れて、身一つを全ふするを、せめてもの幸福とあし、右往左往に落行きて、宛がら千丈の堤を断りたる如くなり。奥向に仕へたる腰元どもさへ、主君親子の流罪と極りたりと聞くや否、一人去り二人遁げ、知らぬ間よ無人の境に獨り取殘されたる御臺所、世も人も頼み難きに泣きて、羅綾の袖を濡らし給ひぬ。

御臺所と申するは前田大納言利家の姫君なるを、豊臣大閤そを我が養女となして、浮田家へ嫁せしめしなり。されど大家に成長給ひて、荒き風にもあたりし事なく、花にも月にも、朗詠よのみ心を寄せて、浮世の事などは念頭にも懸け給はざりしに、如何なればか斯く不運にまし〳〵て、未だ遲櫻の色香も褪めぬに、夫に別れ子に離れて、住み處さへ定め無き身となり給ひけむ。誰かこの幽鬱を慰めて、秋の雨の心の結ぼるゝ中より、早く春の日の麗かなる花の下に、移し導き参らするものぞ。

腰元は居らずなれり。女中は遁げ失せぬ。憂きが中の頼みにしたる乳母さへも、若君の流され給ふと聞くや、疾く影を隠して、今は傍近く仕ふる者は一人も無し。たゞ家元なる前田家より見え隠れに附け置き給ふ腰元三四人と、忠實なる老僕とが御

臺所を守護しけり。御殿は既に徳川家の押領する所となりたれど、世を避けて大坂に住み給ひ、夫と我子の流るゝ日を、今日か明日かと心を痛めつゝも、待ち給ふ胸の苦しさ、如何ならむ。

時は春も未だ若くして、梅は散りぬれど、櫻の花の開くには、十日餘りも間のある眺望も、垂れ籠めてのみ居たまふ御身の、簾の外に音信るゝ鳥の聲すら床しう聞ゆるまゝつれ、居間を徐に出でさせ給ひて、椽の端近くぞ參られける。左までに廣からぬ庭の、久しく箒を入れぬにや、散り敷きたる紅梅の、昨昔の雨の儘よ殘りて、零落の態を粧へるも、御臺所は我身の今に比較べて、潸然と泣き伏し給ふも、それを慘はしとて慰め奉る者だに無し。

折から襖戸を押して、恐る〳〵傍近く來るものあり。御臺所はうち驚き給ひながら、泣顔を袖もて隱しつゝ優しく笑みを傾けて、誰なるやをうち見やり給ふ。彼方は地に平伏して、頭だに擡げ得ず、涙に暮れ居るさまなれど、訝かしと思ひ給ひつゝも、言葉徐に誰ぞと問はる。平伏し居たる婦人は漸う顔を擡げて、御臺樣、妾はお召仕の靜江で御座りまする、先達お國許をお立退き遊ばしまする折より、今日が日まで





陰になり日向になり、これまでお供いたしました、素性も無く身分も賤しき妾の、お目通りを願がうべき機會も無く、他所ながら御機嫌の程を伺ふて居りましたが、仄に聞けバ若君様には八丈とやらんへ御遠島の由、お乳母殿もついては居ず、御幼少の御身の如何に御苦勞遊ばすやと、お察し申上げますれど、お慘はしうて他人事とは思ひませぬ。妾はこれより奉行所に哀訴いたして、その遠い島へお供を願ひ、屹度御養育いたしまする、が、若しも公儀のお許の出ぬ時は……………、それゆゑお暇乞に參りました、御臺様には御機嫌克く、お暮しなされて下さりませ、あア世が世なれどこそ、斯かるいぶせき御住居を、御不自由ともお思召さず、起臥し給ふお慘はしさに、泣かすとすれど涙が溢れる、御無禮御免遊ばしませと、袂を顔に押あて丶、忍び泣いてぞ居たりけり。

御臺所も涙に暮れ、正躰無くてお在せしが、屹と容を改め給ひて。節江泣いて呉れるな、盛衰榮枯は時の運と、妾は諦め居る程に、泣かぬ、嘆かぬ、其方が高誼は嬉しいぞと、花にも濺ぐ血の涙、小鳥の聲も悲しめり。節江は漸う身を起して。御臺様さらバで御座りますと、一禮述べて屋敷を出で、泣く〱後邊を振顧きつ丶、足

早にこそ駈行きぬ。

死を決したる婦人の身には、世に恐るべきものも無く、奉行所の門を入りて、白洲に手を支き頭を下げ。御訴訟申すと言上すれバ、與力同心は聲張上げて。氏素性を申せ、訴への次第は如何と、吼ゆるが如く呼ゝつたり。

花菖蒲

其五（下）

千稻子

權勢の羽根ひろ〳〵と延をして、曉に鶯を聞くの春とのみ樂しみ、峯よりも高き恩を受けたる、御一門の傾くを。對岸の火事はどにも變へず。其家は玉樓瑰殿といふにはあらねど、已が剛慢の兆を顯して壯麗分に過ぎ、一族の方々と肩を並べて檜の皮葺きに日影を隔て、觸らば崩るべき柱板敷は木賊椋葉に愈研き、何事ぞ中門さへ構へて、庭に木立の陰長かり。げにや道行く人は足を緩めて立止り、これは何れの御邸ぞと尋ねて、エヽ知らぬか此の世間見ずめ、青山様だといはれて愈解らず、青

山桜とは問ひかへして、云ふな此奴が寝惚けめと、門守る奴に怒鳴れて、頭を抱へへ逃る者もありとか、自らこそは善しと思ふらめど世の人如何で許さん、況して天地の神のいますをや。知らざるか世には、千草乱れて桐葉落つる秋もあるものを、凩木葉を吹捲きて時雨の袖に月宿る冬もあるものを。

先きの怪しの者は、閉いたる門を潜りて中門を入らんとするを、瞼を撫でゝ其身なりをつくづく眺めたる門番は、慌てゝ走り寄り、まま待ち給へ暫し、如何なる御用かは知らねど、此真夜中に御使とは訝し、其上殿も早や御寝みになりたる折なれば、明朝早く我より侍衆迄申上げて置かんに、今夜は帰りてかういふ譯なりと申述べ給へ、これ、御使の女房殿と、目玉ぱちぱちと光らして頻りに瞬しながら云ふに、此方は、雲間を出る半面の望月、輝く程の面を少しく顯してこゝと打笑ひ、これはこれはまだ先程の夢を見續け給ふと覺ゆ、少しは考へて物云ひ給へかし、一足飛む、行き着きぬべき御殿より、此真夜中に來りしといはゞ、明日に延されぬ御用とは知れた事なり。其御使の御用と云ふは、殿も早や御休みになりし所へ、俄かに北國より使來りて、軍の摸樣など注進ありたれば、それに就き密に今夜の内謀りたき事あ

りとて、態と表だゝず妾に御遣しになりたる事なれバ、こういふ内にも時延びなバ暫待ち給はん、早く此譯を傳へて給へ早く〳〵といふに、首を傾げて聞きゐたる門番は漸く點頭、成程々々、解つたり。能く解つたり。さらバ暫く此處に待ち給へ、傳へてこん程に暫し待ち給へと、同じ事を幾度も繰返して、跡振り返りながらはゝゝと高笑を一ッ殘し、母屋の方に走り行けど、跡に使の女房は足音遠ざかりし頃、五六歩ばかり歩み出し、中腰に彼方を透し見て又後を振返り、何まやあらん靑葉空をつゝむで星の影を隱す木の本に身を寄せかけ、はつと息つぎしが、急に又身を起して其木の下を拔け、其處を傳へて先きの一段繁る木蔭に身を潜め、新月の眉を釣り擧げ、目を睜りて窺ひ居れり。いとゞ悽じきは暗きが中の美人の面想、優しき口元愈緊つて殺氣を帶び、凜としたる目元は一段冴えて凄味深し。

暫くして砂塵舉げて其前を走る者あり。誰かと見れバ門番と覺しく、少し程たちてふら〳〵と此處へ歸り來り、少し聲を高めて、御使の女房殿、何處へ行き給ひしぞといひながら又ぶつ〳〵と呟き、前後見廻してうろさき程呼び立て、頻りに搜す樣子に、さては搜し出されやせん、如何にせんかと思ふ時、早や木の下へ來る樣子に

やうこゝろあれど一足踏み出す途端、既に我が鼻先に立ちふさがり、此方へ脊を向けて後に人ありとは氣付ず、空に仰ぎて高く笑ひ、扨も氣早なる女房殿かな。いつの間にか歸りたと見ゆて、今頃は早や褥の中に夢を見る頃か、それも其筈、此眞夜中に起されて此處迄使に來たのぢや、我に比べて無理ではない、けれど我はまだ〳〵寢られぬはへ、これから殿が御邸へ上られ、それから歸らるゝ迄は田の中の案山子殿、立つたまゝては無けれど、事に依ると今夜は寢はぐれだ、困つた〳〵と、頬べたをびたりと一ッ打鳴らし、夕立殿が御座ると見ゆる、少し暑さを洗つてもらをうと、知らぬが佛の如き、慾もなく德もなく、飾らず繕ろはぬ丸木其儘打出して、得意の高笑を振り散し、門の方へ急ぎて引き返し行けど、女房は、其跡を見送りて思はず滾す一滴の微笑、如何なる胸より湧き出しか。

夜のそよ風ばつたりと止みて、蒸暑さ身に逼ると見れど、南の方に群山の形を造りて、押し出したる黑雲、雷の音を誘ふて稻妻閃々暗を走れバ、今にも大雨は霧を吹いて大地を拂はんとす。青山綱範は急の用ありとの事に、あたら夢の半を破られ、腹立しくもあれど棄てゝも置れず、しぶ〳〵と起き上りて衣服を更め。侍二三人引き連

れて母屋を出で、足音地を砕かん計りに此方へ掛らんとする時、木の間に身を隱したる女房は、手を合せて西の方を俯し拜み、被衣をそつとぬぎ棄てゝ、隱し持たる短刀すらりと拔き、身も寒き垂氷の光を袖に覆ひて逆に握り、息を凝して猛虎の竹林に仇を狙はんとするが如く、寸分の隙間なく身を構へて今や飛びいでんとする刹那、あはや天無情！雲を破つて一瞬天地を照らす電光の影烈しく、木の間を縫ふて潜みたる女房が全身を射れた、目早くも覺つたるか青山は飛びのきながら、邪惡の聲張り上げて、木蔭に狙ふ怪しの曲者、それ召し取れ。

文林

月夜歸雁　近衛忠煕

朧夜のつきのしたゆくかりかねは
聲むかりこそさやけかりけれ

東久世通禧

面白くかすめるはるのいふつきに
鴈のひとつらけしきそへたる

佐々木高行

月影はかすみこめたるさよなかに

聲ばかりしてかへるかりがね　鍋島直大

故郷へかへるかりがねこゑすなり
おぼろ月夜にかげはみえねど　前田利鬯

雁の行く空にかすめるつきみれば
わきても物のなつかしきかな　宮地嚴夫

住なれしあしべをたちて行く雁の
空にかすめるつきのかげかな　小出粲

ゆくかりも雲路いそかぬ聲すなり
空なつかしきおぼろづき夜に　谷勤

あすはまた雨になるべき春の夜の
おぼろ月夜にかへるかりがね　坂正臣

さやかには聲もきこえず春の夜の
かすめる月にかへるかりがね　植松有經

月影のかすみてくらきおほぞらを
なきかはしてもかへる雁かな　內藤存守

春の夜の月をおふぎておもほえず
雁のわかれにあひにけるかな　藤井行麿

山頭歸雁

波とつむこしぢの雪にわりのふね
あさびらきして峯かわりゆく

岡部　譲

世の事と共にわすれしかへりちも
　月にうれしきはなのしたかげ

雨前花　片岡　正占

降來なむつばめる枝もさくらんと
　おもへバ雨ぞまちにまたるゝ

名所花　上地　信光

ひの川やながるゝ花をしるべにて
　としの高ねにさくらがりせん

歸雁　西川須賀雄

歸る雁いざまてしバしみよし野の
　よしのゝ花をつとにやらまし

春川　糸山　貞幹

小草もへやなぎ烟れりむつだが比
　水のこゝろもしたぬるむらし

海邊春曙　草野　隆道

いさり火のかげもかすみて難波潟
　みるめゆかしき春のあけぼの

朝花　千日　亮

昨日までかすみにきえし山の端も
　今朝は花よりしらみそめけり

楠正行母　佐藤　恭順

ちりなそと吾子いさめし言の葉に
　やまとこゝろの花はさきけり

落梅　野崎　宗英

うつろはですぎぬ物ゆゑ惜まるゝ
　時をはなとやうめはちるらん

月前歸雁　韓須賀顧子

故郷になにいそぐらんかへるかり
　花のみやこにつきをのこして　松平　健子

月影のかすめるそらにこゑはして
　すがたはみえぬ春のかりかね　鳥尾　廣子

咲花のこずゑにかすむつきかげを
　あとに殘してかへるかりがね

鶴久子刀自兼題に鶴といふことを
よめる　諏訪　晴子

和歌の浦やあし邊のたつも君の名を
　おもひよそへて千代呼ふなり

春祝　安東　菊子

千代かけていはふ時さへ所さへ
　長きはるひのはなのしたかげ

寄櫻祝　片岡　光子

うえて見るさくらの花も千年まで
　君とゝもにぞ咲きさかゆらん

月の前に花をまつといふことを　小川　昌子

夕月のにほふうへののさくらむな
　このいざよひやさかりなる覧

夕春月　河原崎梅野

夕ざれバ月こそのぼれうぐひすの
　今までさきしうめのこずゑに

行路柳　海上　壽子

うら〳〵と霞はる日は　おのづから心うきたち

しきたへの家をし出て　雉子鳴野邊をし見れど
若くさの小ぐさもえ出　水清きかはのせ見れバ
打むれて若鮎さはしり　見るものに心うつりて
そこらくにい行もとほり　うちなびく柳のもとに
くらしつるかも

女のつとめ　田邊わけ子

何わざのつたなきも、其の人の品、おもひおとらるるものながら、女にして、裁縫の業にうとく、おのが衣も、人にぬはせて、常に、身にあはぬ縫ひざまなるをまとひ、そをだに、やさしとも思はで、家のうち、らうがはしく取り亂し置き、折にふれ、ゆくりなく、客人ありとて、あわてまとひ、召しつかふ女など、のゝしりもてあつかふなど、客人だに、すさまじきこゝちして、何に來にけむとおもふらむかし。哀れ、かゝる女に、めとりたる男こそ、いとほしけれ。公につかふるきはゝ、さらなり。世のなりはひに、かゝつらふ人にも、あしたにいでゝは、夕にかへるを、女の、何くれと、うしろみたすけて、心に用ゐざらバ、いかでか、男の、其の家に、たのしと思はむ。おのづから、あだし人になれそめ、何がしのたかきや、くれかしのざしきなど、心ゆくかたを求めて、住みつきなむ。家とみ榮ゆるも、貧しくおとろへ行くも、女のつとめにこそよれ。哀れ、世のをとめ子よ、書よむことにのみいそしまで、女の手業、何くれにも、心にとゞめて、いそしみつとめ　身を修めて、男の爲に、樂しき家とし給はんこそ、み國のため

ともなるべかりけれ。

古人哲學

師岡須賀子

長閑き春に咲き匂ふ花も、霜雪の寒き冬に堪へたるなり。むすびて、暑をわするゝ水も、こほりとぢて、くまれぬ時もありしなり。斯の事物、ひらけに開け、書は、皇國のは、いふも更なり。各國より、何くれのふみ、足らはぬ事なく渡り、そが上に、活版の業巧にて、いと便よき此の聖代に生まれあひぬるおのれら、息の限り、いそしみ勵みて、君と、親とに報ひまつらでやは。いでや、今の如く開けざりし代の、物學せし人々の、心盡しの程一つ二つかきいでゝむ。されど、いと上れりし代、國史にも詳ならざるは、云はず、中の代となりては、小野篁は、其の家いと貧しくして、親老て、いと弱く、生業のすべきやうなし、篁朝には、出でゝ山中にわけ入り、薪を採り、夕には、入りて水汲み、物あらひ、親に仕へつゝ、傍書よみ手ならひて、遂に、參議聘唐副使とまでなりぬ、又、大江時棟と云ふは、右大辨音人か子なり。牛ひきて、途すがら書よみつゝ行くを、御堂關白道長、くすしき子なりとて、率て歸り、匡衡の子となしつ、後、文章博士となりぬとなり。近き代となりては、學の道やう〳〵開けゆき、學者も、いと多く出たり。そが中に、新井白石の、水あみて手習せし、熊澤蕃山の、中江藤樹の門の下に、二夜をあかして、敎子とならむと乞ひし。荻生徂徠の、大學一冊のみをもて學びし。河村瑞軒の、品

川沖に捨てたる、盂蘭盆のもの拾ひし。伊藤仁齋の、其の子に春の餅をと迫られし。折などの事、おもへば〳〵、いかに苦しかりけむ。いかに口をしかりけむ。いかに歎かはしかりけむ。大方のものならんには、氣も沮み、心も碎けて、いかで堪へえめや。さばかり苦しきことになん、まづしき時をしのぎて、學び勤しみたればこそ、終に、霜雪の冬に堪へて、のどけき春に咲き匂ふ花の如く、氷とけ清く流れて、暑さをわするゝ、眞清水のごとく、世にもちゐられ、人に尊とまれたるなれ。今の世の、わかきどちは、かゝる苦しきことも、口惜しきことも、かなしきこともなく、たやすく學びえらるゝ、忝じけなさを思ひて、露のまもをこたらず、務めはげみて、御恩にむくひまつらでやは。

始聞鶯　　勝家貞良

鳴かぬかぎりはと、打ち吟じたりしは、夢にやありけむ。しのゝめの空、ねざめの床のさう〳〵しき折しも、東の窓の外、近くおきよと呼びいでたるは、きのふけふ、巣立ちやしけむ鶯のまたかたなりの一聲なり。なれも、わが懶惰をいましむるならむと、心あはたゞしう起きいでゝ、やをら窓の戸をし開けば、やどれる梢は、いまだ見えわかねども、匂へる梅が香さへ、いとゞゆかしう、なつかしうかをりたるぞ、心も雲井に飛び立ちぬべく、雪かと見つる疑もやう〳〵とけそめて。

　朝まだきなくうぐひすの一こゑは
　　もゝさへつわにおとらざり鳧

雑報

●東西比觀　こは、日本新聞が、我が國と、西洋各國との風俗を、兩々相照らし、以て、其の、いたく異なれるふしぶしを示せるものなり。中には、吾人の、曾て、耳にせることゝもゝあれど、また、今更のやうに思はれて、其の、いたく異なれるは、驚くべく、其の賤しくきたなきは笑ふべく、其の道を辨へざるは、悲しむべきなり。今、その比觀の(三)を、左に掲げん。

○夫婦の道に於て反撥す

我國にては、夫婦相對するに、恭敬を尙べり。其貴きは、細君より、良人を呼ぶに、「御前樣」といひ、良人、亦、細君に對して、「お前樣」と呼ぶ。其卑しきも、婦は、夫に向ては、「旦那」と稱し、否らざれど、「あなた」と呼ぶ。夫は、往々、婦の名を呼べども、尙、名の上に、「お」の敬語を加へ、「お花」、「お波」など稱するを苟もせず。翻りて、他人に對して、夫、其婦を呼び、婦、其夫を稱するには、抗禮より以上には、單に、名を擧けて、一切、敬語を加へざるなり。曰く、夫「春道」が、曰く、夫「秋義」が、曰く、妻「花」が、曰く、「妻」が何々と。蓋、我は、內、相對しては、敬を主とし、外、人に向ひては、謙を表するなり。

西洋は否らず。上下貴賤となく、夫婦相呼ぶに

は廿、相與に、其名を以てすなり。例へバ、夫の名「ジョン」、妻の名は「マリエット」なれバ、夫は、妻に向ひ、

「マリエット」其上着を着せて呉れ

といふ。こは、左まで、吾々の耳にも障らねど、其妻が、

「ジョン」朝餉喫はぬか、「ジョン」一緒に散歩しようか

などいふに至りて、吾等には、不作法千萬なるを感せしむ。而して、其「ジョン」が、其「マリエット」が、他人に對して、夫を呼び、婦を稱する時には、必々、敬語を加へ、

「マダーム、マリエット」は宴會に招かれぬ

「ミストル、ジョン」は我夫なり

といふ。蓋、彼は、内、相對しては、狎暱を主とし、外、人に向ひては、尊大を示すなり。其他、我に在りては、「夫唱婦隨」といふをもて良家風となし、婦にして、其道を守るを、貞婦となせど、彼に在りては、「婦唱夫隨」が、美徳にして、此道に逆はざる夫を、良夫とはなすなり。斯かれば、我には、「牝雞の晨するは家の盡くるなり」とさへいふに、彼には、「女の奴隷たるを、文明の花なり」とは心得るが如し。東西の相違、斯くの如きものあり。

比觀子曰く、歐俗夫婦の道は、早く、我上流社會の一部分に誘かれ、夜會に顯れ、儀席に見ゆ、而して、醜聲の漏る、最多きは、實に、此一部に多し。察せざる可けんや。

諸嬢は、讀みて、こゝに至り、果して、何の感か起こる。

●女子高等師範學校卒業證書授與式　女子高等師範學校にては、先月二十四日、卒業證書授與式を擧行せられたり。當日は、井上文部大臣代牧野次官、細川前校長、文部省高等官、官立學校長等の來賓あり、卒業生を併せて、凡二百人に餘り、實に盛大なりきとぞ。卒業生の種類、人員、及、校長、其の他の告辭、演説、謝辭等は、左の如し。

○卒業生の種類及人員

高等師範學科卒業生

和歌山縣平民　井上はるゑ

右明治二十六年七月二十一日卒業

長崎縣平民　濱武　龜代　長野縣士族　佐野　富壽
高知縣士族　吉村　千鶴　大阪府平民　松本　よね
島根縣士族　雨森　釧　東京府平民　高木　みつ
京都府士族　高橋　みゑ　東京府士族　木村　せい
岐阜縣士族　安藤　こう　京都府士族　稲田　せつ
千葉縣士族　川崎　ゆう　島根縣士族　林　おやう
熊本縣士族　原田　藍　新潟縣平民　丸山　ぶん
高知縣士族　松山　高

○小學師範學科卒業生

福島縣士族　中澤　よね　巖手縣士族　新渡戸　たか
京都府平民　小金　富士

右明治二十六年七月二十一日卒業

長野縣士族　山口すゞ枝

右明治二十六年十二月二十三日卒業

廣島縣平民　增原　つれ　秋田縣士族　佐藤　駒
鹿兒島縣平民井下　花

○高等女學校卒業生

大分縣平民　保田　縫　東京府士族　樫村　壽
東京府士族　細川　淳　東京府士族　内村　志滿
東京府士族　須川　梅　東京府士族　細川　滋
東京府平民　宮木　滿勢　東京府士族　細谷　富貴
東京府平民　兒玉　光衛　東京府士族　五十嵐　八百
埼玉縣士族　眞砂野　郷　廣島縣士族　天　安

埼玉縣平民　山田智慧　　新潟縣士族　雛田千尋
靜岡縣平民　池谷友子　　東京府平民　中村伎
東京府士族　稻垣紈　　秋田縣士族　横山悅
石川縣士族　早川政　　埼玉縣平民　山田幹
東京府士族　岡田照　　東京府士族　三浦一
東京府士族　淺井茂登　　山形縣士族　羽鳥律
東京府平民　大貫清　　新潟縣平民　今井逸
山口縣士族　野村久理　　東京府華族　戸田桂
東京府平民　柳澤四十　　東京府士族　小池瑛

○秋月校長告辭（あきづきかうちやうこくじ）

本日文部大臣閣下其他貴賓ノ臨場ヲ辱クシ茲ニ本校第四回卒業證書授與式ヲ擧クルヲ得タルハ誠ニ諸子ノ榮トス惟フニ諸子ノ多年螢雪ノ效ヲ積テ以テ今日ニ至リシハ猶草木ノ風霜ヲ凌キテ春花ヲ呈スルカ如シ春花固ヨリ賞スヘキモ秋實ヲ結テ後始メテ其眞ニ賞スヘキヲ知ル諸子モ亦宜シク學業ヲ實地ニ應用スルノ秋ニ臨ミ善良ノ果實ヲ收メテ後始メテ其榮光ヲ荷フヘシ然レトモ予嘗テ之ヲ聞ク國家教育ノ本ハ家庭教育ニ在リ家庭教育ノ本ハ一家ノ母儀ニ在リト諸子今ヨリ此校ヲ去テ人ノ師ト爲リ妻ト爲リ母ト爲ルヲ問ハス均シク國家教育ノ一部ヲ負擔セサルハナシ其責實ニ大ナリトス則所謂螢雪ノ效ヲ實地ニ應用シテ以テ好果實ヲ收ムヘキノ秋ナリ諸子ノ將來ヨク此ニ努力シ孳々トシテ己マサルコト猶從來此校ニ在テ夙夜區勉スルカ如ク益ゝ徳ヲ修メ智ヲ磨キ品行ヲ正シクシ由テ以テ忠君愛國ノ志氣ヲ維持スルニ足ラハ始メテ眞正ノ榮光ヲ荷フニ任フヘシ如此ナレハ是レ獨リ諸子ノ榮光ノミナラス亦以テ本校ノ榮光ト爲スヘシ諸子ソレ之ヲ勉メヨ

○細川前校長演述（ほそかはぜんかうちやうえんじゆつ）

凡ソ生ヲ禀クル者男女兩性ノ別アリト雖モ其人タルコトハ則一ニシテ人々各其智能ヲ具ヘサルハナシ女子ノ智能ヲ具フルコト固ヨリ男子ノ智能ヲ具フルニ異ナルコトナケレハ男子ニシテ教育ヲ受ク可シトスルトキハ女子モ亦教育ヲ受ケサル可カラス此女子教育ノ原則ニシテ方今人々ノ認識スル所ナリ加之女子ハ鋭敏ナル感觸緻密ナル志慮ヲ有シ百事ニ忍耐シテ厭倦セサルノ特性アルヲ以テ此原則ニ本ツキ其精神ヲ學問ノ一途ニ用ヰシムルトキハ女子中ニモ學者輩出シテ女學士女博士ヲ出スコト疑フヘキ所ナシ然レトモ此レ決シテ實際ニ行ハル可キ者ニ非ス女子ノ本分トシテ年齢漸ク長スルトキハ婚嫁ノ期ヲ愆ツ可カラス其人ニ適クニ及テハ凡百ノ家事ヨリ子女ノ養育ニ至ルマテ擧テ一身ニ集リ夙夜拮据シテ更ニ學藝ヲ講スルノ餘力アルコトナシ己ムコトヲ得スシテ女子ノ教育ニ制限ヲ設ケサルコトヲ得ス此制限アルトナキトハ即男子ノ教育ト女子ノ教育ト由テ分ルヽ所以ノ尤著明ナル者ナリ男子ノ卒業ハ猶進級ノ如キ意義ヲ有スレトモ女子ノ卒業ハ恰モ終局ト言ハンカ如キ者ニシテ卒業後ノ境遇ハ全ク一新スル者ナリ學問ノ一點ニ就テ言フトキハ男子ノ教育ニ

謂ル所ナキニ非スト雖モ此即女子ノ本分ヲ全フスル所以ニシテ女子教育ノ本體ナリトス師範生徒諸氏ト高等女學校生徒諸氏ト稍異同アリト雖モ共ニ家庭ニ在テハ父母ニ事ヘ家事ヲ助ケテ淑女トナリ又賢妻トナリ賢母トナリ以テ平生ノ學フ所ニ背カサランコトヲ勗ム可シ能ク此ノ如クナラハ女子ノ本分ヲ全フシ女子教育ノ本體ヲ失ハサル者ト謂フ可クシテ決シテ男子ノ教育ニ譲ルコトナカルヘシ

○文部大臣代牧野文部次官祝辭

本日ノ光輝アル卒業證書授與式ニ臨ムハ余ノ最モ欣喜ニ堪ヘサル所ナリ諸子ハ自今以後去リテ教育上ニハ良教師トナリ社會ニ在テハ女子ノ標準トナリ常ニ貞靜ノ淑德ヲ修メ以テ能ク本校ニ學ヒタル所ノ本旨ヲ達スルニ於テハ諸子ノ榮譽ハ更ニ一層光大ナルモノアラン此ノ如クナレハ獨リ諸子ノ榮譽ノミナラス實ニ國家ノ慶福タリ余ハ諸子カ今日卒業ノ榮譽ヲ荷フテ前途益〻其ノ榮譽ヲ光大ナラシメンコトヲ望ム願フニ本校設立以來師範學科、小學師範學科ヲ合セテ三百三十餘名ノ卒業生ヲ出セリ是等ノ卒業生ハ多ク各地方ニ散在シテ教育ニ從事シ世上ニ良教師ナリト稱セラルヽモノ亦少カラス此ノ種ノ教員任用ハ目下概子本校卒業生ニ需ツアルノ狀況ニシテ供給上大ニ缺乏ヲ感セリ此ノ如ク本校生徒世ノ信用ヲ得ルニ至リタルハ特ニ其養成ノ宜キヲ得タル結果トシテ本校ノ爲ニ賀スルト同時ニ諸子ハ永ク此ノ信用ヲ失墜スルコトナク今後益〻本校ノ名譽ヲ高クシ教育上ノ必要ニ應スルニ力メラレンコトヲ望ム一言卒業諸子ノ爲ニ祝シ併セテ本校ノ隆昌ヲ祈ル

○師範學科卒業生總代濱武かめよ謝辭

今日のよき日に卒業證書授與の式をとり行はせ給ふわれら數ならぬ身にしてさしごころこれの學びの庭を立ならし今はた此時にあふことを得て此證書を賜はることのうれしさよことはひさへに校長をはじめ參り師の君たちのあつきみいつくしひのたまものによりてなりけりあはれ海も淺し山も程なし此御めぐみを何にたとへむはたいづれのときにかわするべきいまより後は畏き勅諭の御主意を奉戴しながき年月あしたゆふべに教へ導かせたまひける學びの業を勵み折々ことの御諭しの旨をもゆるかせにせす身を修め女の道を守りてひたすら教育の心わざに心をつくし御惠の萬一にむくい奉らむさわれも人もひさつ心におもひさだめつるよしを師範科卒業生一同にかはり謹みて申す

○高等女學校卒業生總代保田ぬひ謝辭

おのれ此學校に入りしはきのふけふと思ひしに年波のあがれいと早くてこゝに五とせの年月をへたり校長をはじめ參り師の君たちの懇ろなる御教によりかつ〲定まれる業を卒へてけふしも其志ろし文賜はりぬおのれ拙き身にありながらかく盛なる式のむしろにつらなる事を得るもかしこき大御代の御惠ろと思ふにそのうれしさはせまきたもとにつみあへずなん志かはあれど

なれぬ世のまじらひはなかなかに暗路をたどる心ちしてわけゆくべき道をしらねど只師の御教をさもしびともたのみいよいよ行をつゝしみて女の道を修めふかき御恩のかたはしをだにむくい奉らんとおもふ心は切なれどもさよりぎはなき身にしあればそを筆にのべんすべも知らずたゞ思ひあまる一節をのべ謹みて謝し奉るになん

●東京府高等女學校にても、去る一日卒業證書授與式を行はれたり。これ、また、數多の來賓あり。校長の告辭あり、知事の祝辭あり、卒業生の答辭ありて、其、盛なることなりきといふ。卒業生は、左の如し。

第五回卒業生明治廿六年四月

定方きね　宮原かつ　青山たけ
志賀あい　鈴木はな　中澤ちやう
山木かめの　稲澤ゑい　川上しさ
佐藤すて　太田すみ　湯淺ますみ
飯塚いち　伊藤こさ　島山ちよ
井上ふじ　宮田かね　立石はる
市川のぶ　川村ろく　大島ちやう
西尾やへ　田中ふゆ　安田ため
清水せい　前藤こさ　竹下つま
川上きん　小高もさ　西ます
田中はな　大山きち　磯野むら
小柳つま　高野ぶん　小板むら
小宮みよ

小計三十七名

第六回卒業生明治廿六年十月

吉井けい　宮川きやう　中川すか
大森かな　吉田きやう　西まつ
柴田こすゞ　品川ゆす

小計八名

第七回卒業生明治廿七年四月

増岡なしへ　鈴木よれ　境野てる
中川きく　高裕ぬい　強田はる
杉村ぎん　吉田たま　松浦さら
谷はな　岡すゞ　森ふく
稲葉みさ　館てい　中村さみ
深澤みち　松本りき　塚野さみな
水口みつ　平松きくな　寺木ひな
十川あさ　西尾るい　大橋いし
増田いつ　菅谷るく　小林ないか

小計二十七名
合計七十二名

●また　女子成立學校にては、一昨三日、第六回卒業證書授與式に、第七紀年會を併せて、淺草鴎遊館に於いて、盛式を擧げられたり。來賓諸氏の、有益なる演說あり、其の他、種々の催ありて、いと盛大なりき。又、このたびは、左の卒業生を出だしたり。

高等全科卒業
花岡梅子　波岡しま子
高等撰科卒業
大給竹子　大給園子
本科全科卒業
相羽政子　大崎ふれ子　松原きやう子
本科撰科卒業
加藤きみ子　中川しん子　工藤正子
西田夢子　山本千代子

●貞女ふで　は、茨城縣那珂郡木崎村大字南酒出の寺門新八郎の妻なり。明治十年の頃より、夫は、半身不隨の難症にかゝり、病蓐にあること、十年餘の長き月日なりしに、家元貧しければ、心に任せぬことのみ多く、一人藥餌の手あてなど欠ことなく、其の上三人の子供ありしかど、ふでは、日毎に傭はれ人となりて、僅の賃錢を得て、家計を支へたりき。去る二十二年夫は終に失ぬ、ふでの悲みはたとへん方なし。されども、其の後は、いよ〳〵勵みて家業をつとめ子供を養て、今は多少の餘裕さへ出來て、一家睦く暮すに至りしとぞ。

●孝子と順婦　福岡縣山門郡小川村大字大江といへるところに、松尾佐平といふ有り。天性至孝

にして、父母を愛養すること、終始怠らず、父壽平は、今年七十九歳にして、五六年前より、大に老衰し、常に一室に閉居せり。されど、時々の自由も得がたく、何事にまれ、氣むづかしきを佐平は常にいたはり、ひたすら其の意を慰め、家業にも心を盡し、其の苦をも苦とせず、出稼なんどの時、必、これを告て出行といふ。この至誠や感じけん、其妻とよも世に珍しき女にて、嫁してより二十年、よく夫へ事へ舅姑にかしづき、何事もかひ〳〵しくつとめて、子供のしつけも心を盡し、且、壽平の湯に入るときなどには、いと懇に、流し淸めをもなして、夫婦の間、いと睦く、一家靜に治まり行こと官に聞けれバ、縣廳より、金圓を賞與せらしといふ。

●今様長歌湖上の美人を讀む　湖水といふ言葉、既に、幽邃なり。淸冽なり。閑雅なり。美人といふ文字、既に、優美なり。可憐なり。艶麗なり。あはれ、湖上の美人、此の長篇の今様長歌、讀めども、益、淸爽なり。幽雅なり。優美なり。可憐なり。艶麗なり。しかも、氣慨あり。品位あり。讀み出づる時は、淸流の、幽谷より湧き出づるがごとき心地せられ、讀み終はる時は、餘韻、遠く、翠嶺の松籟を聞くが如き思あり。誠に、高尚、優美、可憐、可愛、可誦の長歌なり。小説なり。昨日、終日讀み暮らし、昨夕、終宵詠みあかして、遂に、飽く時を知らぬ心地して、誠に、四百頁の長篇、一片の捨てまほしき所なく、何處も、可憐、可愛なるが中に、わきて、心にとまりて、あはれなる

所といへば、まづ、第一章の第一句「モナンの小河風さえて」と起こし來りたる一句、巧を入れず、飾を添へず、誠に、裕々として、急ならず、迫まらず、千金を引くの力あり。數百萬言の端緒として、更に動かぬ筆意あり。頻に、鹿を逐はむとして、あへなく、愛馬を仆したる條は、一句一語、悲哀ならざるはなく、多情多恨、秋風原頭に、白骨の埋むる壯士の涙に似たるけしきあり。それより、深山幽谷の景、層々として描き出でし所は、譯者が、卷頭に、スコット氏の文を稱したる句を以て、又、筆端に、峻嶺聳えて、綠樹茂げり、淸流みなぎりて、玉藻流るゝ心地すとや評せむ。

第二章も、又、優美なり。高尚なり。此の章は、風景よりは、情色を以て勝れり。殊に、少女が、伶人と共に、客を送りて、孤島の蘆邊、伶人は、主家の昔榮を追懷し、當時の枯境を嘆くを、少女は、反りて、浮世の塵を厭ひ、湖邊の淸床を悅びて、老僕を慰むるあたり、又、少女が、父を勞り迎ふるあたり、情、あくまで濃に、心、限りなく淸し。又、譯者が、卷頭に、スコット氏の文詞を評したる句を以て、舒々と說き來れど、文詞には、霞たなびき、花さきにほひ、月澄みわたり、露ちりまどふ心地すとやいはむ。

第三章の中にては、戰の急使のさま、又、黨の者どもの馳せあつまるさま、白雲のむらがりて、大山を擁するが如き觀あり。又、泉流の、聚まりに聚まりて、大川のみなぎりゆくが如く、當るべうも非ず。筆力雄然たり　又、ダンガンの鄉人が、

将を哭する挽歌は、悲壯悲哀。
第四章の中にては、ヒッゼームスが、少女の岩屋を尋ね来りしわたり、又、狂女の臨終のわたり、一は、可誦可憐の句、一は、可哀斷腸の辭、何れも捨て難く、忘れ難き思す。末段、ロデリクと、ヒッゼームスとの一條、強に屈せず、弱を打たず、誠に、武士の眞面目。文も、又、鐵石の重あり、男兒の、必、愛誦する所。
第五章は、英詩の、最長ずる所、國歌の、最拙き所 從ひて、譯者の、最苦しみたる所ならむ。而して、筆に、苦跡なく、詞に、澁所見えぬは、譯者の勉強思ひやられたり。末段に、ダグラスが、賤男等の赤心を謝し、且、輕擧を戒むる條は、思はず、二度三度繰りかへしたり。蓋、譯者は、かかる筆に、最長じたるが如し。
第六章は、最愛讀したり。その一に、浮世の狀態を、曉の光に映したるけしき、おのれは、原詩にも勝れりと思ひぬ。ジョンといふ武士の言語擧動、一擧一動、皆、興あり。味あり。げに、詠する時は、書中、自、其の形其の姿見ゆるもをかしかり。戰闘をうたふわたり、筆端に、大刀輝き劍鳴り、三軍を叱咤する聲きこゆ。ロデリクの臨終、伶人の挽歌、勇壯、又、斷腸。少女の赤心、國王の風姿、その二十九は、譯者が、特に加筆したる所あり。加筆の有樣、大に面白し。スコット氏、も之を見ば、首肯するならむ。最終の結辭數言を結ぶの力、又、充分に見ゆ、讀み終はれば、嗚呼、眞に、可誦可愛の長歌なり。小說なり。

さはいへ、長篇といひ、殊に、譯詩の事ならむか、語調の苦しき所、或は、文辭の整はざる所、或は、簡潔を望みて、もの足らぬ節、或は、優婉を欲して、冗に流れすぎたる所、或は、物語として語らば、妙ならむも、歌としては、をかしく耳立ちて聞ゆる所、かれこれ無きに非ず。此處彼處に見えたるは、遺憾なり。月の上の雲の如き心地して、いま〳〵しけれど、我が國三千年、詠みならひ來れる和歌に、ためしなき新しき光は見えてうれしや。三十一文字の短歌に汲々として、一字一語の小刀細工に齷齪する事は、吾人の、常に、遺憾と思ふ所なりけり。此の書、辭書とは云へど、太刀を以て、大宇宙をかきうたはむと思ひ立ちたる譯者の心、思へば頼母しき限りになむ。雨江釣士、自愛せよ。

（多感生）

兼題

四月廿日
- 歌……半政子
- 文……蓑衣に添へて贈る文

五月五日
- 歌……首夏月
- 文……時鳥を聞きて懐をのふ

教の庭

四月五日兼題 花盛

天　京都市寺町二條　橋爪乙女

吉野山かすみふきとくあさかせに
うごかぬ雲はさくらなりけり

地　埼玉縣浦和町　大橋てい子

またひ來てむつぶ胡蝶の羽風にも
こゝろおかるゝ花ざかりかな

人　千葉縣東葛飾郡野田町　内田慶子

きのふけふ人の行來のしげきにも
花のさかりはしられぬるかな

野も山も今をさかりとさきみちて
いろ香たへなる花ざくらかな　片岡光子

（天地人の外は原稿到着順なり）

吉野山千もとのさくらさきそろひ
そらまで匂ふはなざかりかな　江馬信子

春風ののどかに吹きてとほやまの
かすみもにほふ花ざかりかな　村田きよ子

見れど／＼花の木陰のたちうきは
さきのさかりのみよしのゝ山　村田みつ子

白くもと見しはさくらの盛りにて
はなよりはなの三よし野の山　石井德子

咲つゞく花よりはなとやまのはの
しら雲をさへうづむころかな　内田雪子

立こむる春のかすみと見るまでに
外山のさくらいまさかりなり　花山やすゑ

三吉野は花のさかりになりにけり
いさゆきて見ん移ろはぬまよ　花山みさを

白くものたゞよふ空とながめしは　馬島久仁子
さかりあらそふやまざくら花

長閑さは天津みそらにみち〳〵て　佐藤敬子
こぼるゝばかり匂ふはなかな

ほの〴〵とかすみにしらむ隅田川　尾崎なほ子
岸のさくらはいまさかりなり

春がすみ匂ふはいづこみよし野の　羽田千世子
よし野の山のはなのしらくも

散りもせず咲も殘らぬさくらばな　青木春子
けふをさかりの眺めなりけり

雲としもまがふ千本のさくらはな　菅谷こう子
みれどもわかず花のさかりは

しら雲の棚びくやまのはなざかり　菅谷とく子
何れをそれとわきて見るべき

隅田川つゝみのさくらさきいでゝ　豐田まさを
いまを盛りとなりにけるかな

やまぶみもいよ〳〵心のどかなり　佐々有郷子
散りもはじめぬ花のさかりは

野も山もみなおしなべて此ころは　小橋幹子
はなのさかりとなりにける哉

押なべて花のさかりになりにけり　小橋幸子
いづこもおなじ匂ひなるらん

散りもせず咲も殘らぬ今日こそは　千々波楯子
まことに花のさかりなりけり

長き日もながめくらしつ三吉野の　徳永萬壽子
やまのさくらの咲のさかりは

櫻ばないまさかりなりみやこびと　澤田春子
きてもとへかし今さかりなり

打むれてしのぶが岡に來て見れば　神田靜子
けふぞさくらの花さかりなる

隅田川はなのさかりになりぬれば　溝口秀子
うまもくるまもやられざり鳬

白くもの上野のをかに來て見れば　神田花子
はなは今日こそ盛りなりけり

霞たつ四方のやまべを見わたせば　山室よし子
いまこそ花のさかりなりけれ

をちこちの山には花の咲きみちて　新沼よし子
何處のさともにぎはひにけり

春なれや四方の山べもはなさきて
見に來る人もおほきこのころ　新沼すゑ子

春なれや何處のさともはなさきぬ
いざ見に行かん遊びがてらに　新沼すみ子

きのふけふ花の盛りにあこがれて
長きはる日のあかすもある哉　高井 米子

春かせもこゝろして吹けさくら花
さきの盛りは今日にぞ有ける　上野 兼子

さくら花ちりなん後のおもひ出に
盛りのいろを身にはしめてん　土生 清子

白雲のたえずなびくとおもひしは
よしのゝ山のさくらなりけり　辻 やす子

高砂のをの上は今朝もはれやらで
うらみし雲は花にぞありける　猪原すみ子

春日野はかすみと共にたなびくは
いまをさかりのさくら花なり　山河 俊子

昨日今日よし野のさくら咲みちて
とひくる人の多くもあるかな　木原あさよ

折りかざしゆきかふ人に言とへむ　野田もと子

たか根の雲はさくらなりけり

吉野山はなのさかりは遠地近地に　野田みす子
とひ來る人のたえずもある哉

消えはてぬ雪かと見ればあらし山　松浦 貞子
いまをさかりのさくらなり鳧

見る日より侍つ日の多き山ざくら　住田まつ子
けふぞ盛りと咲きにほひけり

きのふけふ花のさかりに山ざとも　住田やすの
いと賑はしくはるめきにけり

吉野山はなまたはなのおくふかし　兼田 文子
なくうぐひすの聲もかすみて

雲と思ひかすみとまがふ三吉野の　兼田 敬子
はなの盛は今日にぞありける

咲きみちて色こそ雲にまがひつれ　加藤 [illegible]子
花のにほひぞ似るものもなき

野に山ににほふのみかは見る人の　師岡千代子
こゝろの花もさかりなりけり

心してかせも吹かなんさきにほふ　河野 文子
はなの千本のけふのさかりは

雲とみる花のさかりはけふならん
ゆきにまがひてちる枝もなし　羽田三諸子

さくら花咲きのさかりはひと本に
廣野のはるをあつめけるかな　新藤比佐子

待ちわびしうさしわすれて暫くは
はなのさかりは三吉のゝやま　吉田　芳子

やがて散らむ物とも志らで咲花を
見るやこゝろの限りなるらむ　横瀬たか子

見る人の限りなるらむさくらばな
さきも殘らず散りもはじめず　宇野さく子

まちわびし心わすれてさくはなを
見るやさくらの盛りなるらむ　山田　米子

咲きにほふ櫻のはなのさかりには
ひとのこゝろも長閑かりけり　矢野　光子

さくら花さきのさかりは世の中の
人のこゝろもそゝになるらむ　棚橋すま子

此ころは雲さへはなとみるやまに
はなは雲ともうちかすみつゝ　土屋てい子

よしの山峯もふもとも咲きみちて　中村　備子
見渡すかぎりはなになりけり

散りもせず咲も殘らぬやまざくら
けふは見るべき盛りなりけり　中鉢　秀子

雲かはな花かくもかとまがふまで
そらさへにほふ三吉野のやま　押尾　菊子

常盤木は雲のたえまと見ゆるまで
はな咲きみてるよものやま山　羽田たか子

わがいほの主はさくらか咲みてる
今日はあまたの人も思ひきぬ　櫻田さよ子

九重のみそのに生ふるいとざくら
いまをさかりと咲き匂ひけり　永易　幾野

咲みちて峯もふもともよしのやま
はなより外のいろなかりけり　永井まい子

春風もはなの香ばかりさそひきて
さかり志らるゝ山ざくらかな　山内さだ子

さくら花さかりなるらむあらし山
松をのこしてにほふ志らゆき　山内てい子

風もなく三つ四つ二つちるばかり
はなは盛りになりにけるかな　河原崎梅野

あさゆふに思ひをかけし庭ざくら　竹内美枝子
今をさかりとさきにほひけり

さくら花今をさかりと咲きみちて　宇多田楊子
人もにぎはふ三よし野のやま

さくら花にほふ盛りはよしのやま　野尻鶴子
雲よりほかのいろもなきかな

白くもと人や見るらんやまざくら　伊達富貴子
いまを盛りとさきにほふなり

三吉野のかすみの奥に來て見れど　水谷清子
くもゝまがはぬ花ざかりなり

おしなべて花のさかりに成ぬらん　土川たづ子
行きかふ人のそでもにほへど

朝戸出の袖にほふまでこゝかしこ　北佐分すへ子
はなのさかりになりにけるかな

さゞれ石のうへ行く水は淺けれど　北川貞子
色香ぞふかきにはのさくら木

さきにほふ花のさかりは三吉野の　藥師寺芳子
山はみながらしらくもにして

名に高き吉野のやまのさくらぞな　藥師寺琴子

みねもふもとも今さかりなり

白雲のかゝると見しはあしびきの　瀬戸さと子
やまのさくらの盛りなりけり

吉野山いまをさかりと咲きにほふ　山口榮子
はなは御國のながめなりけり

吉野やま花のさかりになりにけり　黒澤榮子
やへの雲井は香ににほふらむ

三よし野の吉野の山のはなざかり　一條てふ子
きゝしにまさる心地こそすれ

吉の山見わたすかぎりはななれバ　横山卿子
たゞ白くものかゝるとぞおもふ

知るしらず見る人多しすみたがは　横山須賀子
つゝみの花のさきのさかりは

うかれでぬ人もあらしの山さくら　横山きみ子
今にそはなのさかりなりけれ

足引のやまにははなのさきみちて　平野君子
かすみも雲も見わかぬなり

おしなべて花の盛りになりにけり　安井貞子
雲かゆきかとあやまたれつゝ

吉野山はなのさかりに來て見れど　安井　勇子
くもに分入るこゝちこそすれ

きのふけふ花の盛りになりにけん　伊東　文子
外山のかひにかゝるしらくも

賤が家の垣根のはなも咲きみちぬ　蕪木　蝶子
みやこも今やさかりなるらむ

よしの山みながら白くなりにけり　松野　梅子
今こそはなのさかりなるらめ

白雲と見まがふまでにさくらばな　岡本みつ子
いまをさかりとさき匂ひけり

咲きみちて散りも初めぬ三吉野の　岡　佐波子
はなは山をも染めて見えけり

四月五日兼題　山櫻の感

天　熊本縣菊池郡城北村　佐々有鄰子

木のめ春雨あとなくはれて大空のみどりにかよふ柳はあれど夕日影てりかはす桃花の林はあれど雁がねは霧のおくに飛つれてかへれど谷の蛙はころとなけどこてふは菜の花にむつるれど春情はいとあささものなれど立いでゝ見つべく聞つべくもあらぬに露のとどりはの〴〵とあけ行曉がたの山のはに白ゆふなして棚引雲のたえまよりえもいはれぬにほひの朝日とともにをすのうちにいとふかうさし入るは今をさかりのさくら花になんありけるあなめでたあなおもしろとうたひいづるもをりからひとしほ感情厚く覺えてなん

地　府下南豊島郡元澁谷村　河田いし子

四季折々に咲きいづる花の數々あるがなかにとしごと春立つ日より人も我もたのしみまたるゝ我日本の櫻の花におよぶものはあらじかし昔しのことわざにも人は武士花は櫻といひしもことわりにて花としいへバ櫻とのみ思へるにても知られたりこのめでたく美しき花のなかに又こきもうすきも八重も一重もありていづれおとらぬ色香に咲き出れど庭のおもに木ふりをつくり養ひたてゝよき花さかせむやと人々の心盡し櫻木は上流にてよき敎をうけおひたち給ひしひめたちのごとく美しけれど

それとはやうかはりて山櫻のやしないもなく手入もなくおどろがなかに生ひたてど幹もすなほにしてまからず雜木のなかにたちまぢりて八重にかさなる花もなくたゞ一重に色もうすく咲き出たるぞ其すがたなにとなうあはれにゆかしくて此花こそひなにおひたちしきづの女のをしへず學ばずして生れながらの人の道をつくし後世までも芳はしき名をのこす貞女孝子にたとへつべけれ女鑑其外のふみなどに見ゆる貞女孝子はひなの人々多けれども恵あまねき大御代に生れあひて學の道に入りよき教育をうけてそだちゆくらん人は此の山櫻におとらずやまとにめでたき花なりと外國人までもめづるやうなされかしとつたなき心にも思ふになん

人

山口縣佐波郡島地村 宇多田楊子

世に花とし謂へば數ある中にその尤も艶美にして趣のあるものは彼の山櫻花にそありける二の花こそは我神代の昔より咲出で丶外國には生ふる事なきものなれども古より日本の花の王として誇りたり

されば古人も「敷島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ山櫻花」とこそは詠じしか實に山櫻の朝日に匂ふ姿を見ては誰か感賞せざる者あらんこの數言を以て大和をいひ盡くしゝはまことにいみじき歌ならずやかしこくも大御代に遭ひつるおのれらは千早振神代より傳へ來しひじりの道をのりとし身に行ひて山櫻の朝日に匂ふ姿を失ふ事なく守らずてやはあるべき

豊田まさを

はるもいつしか來りて暖となりたれど所々の櫻花も咲きいでたる由なれど友達に誘はれて家を出て飛鳥山上野隅田川など彼の山この野と歩き行々に何所の山櫻も是見よがしに咲ける樣いとも見事に心地樂しく遊びけり

春くれど何所の山もうちかすみ
さかりに咲ける山櫻かな

馬島久仁子

くる春ごとに我人共にめづるは花成けりいつも開

田川原などへ家の子うちつれて遊びぬれど今年こそは山のさくらを尋ね見んとつねかたはらに召つかふ者二人斗りことバがたきにもとうちつれて行きけるにをりしも花の盛にていとうつくしう都のながめとは又ことなる處ありて所々山々谷合などに咲そろへるさまえもいはれず上野の花など上もなきながめと思ひしにけふはからずもいづこと定め無くかくめでたき花の山にし入しこと都人にもしらせまほし此まゝにちりなん迄とふ人無きはいとをし

　　さは姫の袖かと見ゆるやまざくら
　　　　とふ人なしにはなやちるらん

又一人か

　　せめてだに一枝なりとも手折とや
　　　　花のさかりをひとにしらせん

とたがひに口づさみながらあちらこちらとながめよき所にしばしやすらひもてきし木のめこのみなどたうべたがひに此けしきを都近くうつして月花共にながめなどいか斗り樂しからんなどいひつゝもおのれの父の七年ほど前に身まかり給ひしが殊に月花をめで給ひし山又山などに花かりし給ひし昔を思ひかけて

　　たどるべき人もなければ花のやま
　　　　有しむかしもしのばれにけり

　　山里のはなをしたひてよぶこどり
　　　　ちゝよとなきて行こゝちして

などいひつゝ一人花ををり心あまり此無世の人を思ひ出てそゞろに懐舊の涙とゞめあへずかれこれ時うつり日もはや西に入り山また山もかりつくして長き日ながら夕櫻に心殘して歸り道はおぼろにかすめる彌生の夜の月に送られておもしろくいぬの比家居にこそは歸りつきぬれ

土屋てい子

櫻は大皇國の花なり是をめづるはたゞにはひうるはしきをのみめでたしとにはあらず吉野の山に昔を忍び山室山に古をしたふは皆心に深く感ずる故ならむさて此花の操をおもへば外國の土には生ひす飛ひとり皇國の花とにはひてむかしは脩德朝臣

歌を止めて其節操を花と共に世にあらはしにき近き世に平宣長翁の朝日に匂ふ山櫻花の歌は人の心に染みたるもまた〳〵此花の操を賞たまひて外つ國ぶりに心をうつさず大和心を振起して此花の如く潔き操を守るべしとをしへたまへるなるべしそを大和心としもいへる花が上に朝日のかゞやく如くうるはしきものとのみ思ふはいかにあらんさてしも吉野の山の山櫻山室山の花の朝を誰やし人かまた甘さらんあはれ虎の尾楊貴妃墨染などいふことことしき名つきたらんものはありとも山櫻の諂ひ媚ぶる色なくて清らかなるにまされる花はなかるべし

伊東　文子

のどけきもの丶ためしたびくなる春の日もまづ心なきかぜはあかずむかはまほしうおもふ花のにほひもあへぬに時ならぬゆきとみるまでにふきはらひてはいとゞ梢をながめがちなるを此山櫻のみはよるかぜも音づれねばやうつせみの世にこびんともおもはでをのづからなるいろ香をたもち心のまゝにはるを春としてうらめるさまもなきはかしこき人の心にもおさ〳〵をとるまじういと〳〵うらやましき事にこそあはれわれも此世の外にかゝる花をしも玩びてうきよのあきもしらですまゝしかはいかにうれしくたのしからん

岡　佐波子

櫻は我邦にのみ生出て外國には曾てなき木にこそありけれ長閑なる春の彌生に四方の山々咲き匂ひたる様は霞か雲かとぞかり疑はれ中にもすぐれて早きは消のこる雪と見ゆるもいとあはれ也又遅く深山の奥に咲きたるは青葉の中に交りていとなつかしきに谷間の鶯の古巣をたづねてそが小枝に時を得顔に節面白く囀づるなどは筆にもことのはにもなか〳〵になんましておもふどち見つゝあるはどに夕日照りそひて人の面さへ紅にはゆたるよあはれにもおかしうなむ

餘芳

みちのつと（つゞき）

小池道子

うしろの方に、ことに、香華など手向けたるみ像あり。將門征討の折、祈念せさせ給ひし執金剛神なりといふ。二月堂にもいらせたまひて、もとの倶樂部にかへらせたまひ、晝のおもの、きこしめして、更に、大佛にまうでさせ給へり。本尊のみ像のいかめしさ、聞きしにも增りてなん。ありとある佛像をはじめ、千年餘りの軸物、寶物ども、あまたつらねて、御覽せさす。めでたき物ども多かれど、心も、筆も及ぶべきにあらねば、皆もらしつ。末の方には、土地の產物どもゝ、つらねたり。それより、正倉院の寶庫にわたらせたまへり。聖武天皇の御料の物ども、をさめさせ給へるなりと。勅封にて、たゞ人にはゆるさせたまはぬを、有がたき御かげにかくろひて、見奉るかしこさ、更にいはん方なし。

千代をへておなじみくらにつたはれるたからぞくよのたからなりける。」めもおよばぬ物ども、物志り人になりて、見奉らまはし。外國人も、此のみくらのものを

みて、驚かぬものなしとなん。みくらも、そのよにたてさせ給ひしまゝにて、兵火にもかゝらざりきと聞くこそ、たふとけれ。興福寺、猿澤の池のわたり、御車のままにて、めぐらせ給へり。池の玉ものと、よませたまひし比は、人家もなくや有りけん。夕つかたより、大和萬歳、伊勢神樂、薪の能樂など、御覽せさす。能は杜若、狂言は花折也。舞臺は、芝生にて、薪の光りにみゆるさま、古めきて、おもしろし。こは、春日神社に、奉納のさまを、うつせるなりとぞ。大膳のつかさ、おものに奉る物のまれなるに、いたく、心をつくせるよし。人のかたるを聞きて、うち〳〵に啓しつるに、たびに有りては、さと人の情をこそ、えらまほしけれ。ことそぎて奉れと、仰ごとありしを、もらしつるに、みな、いたく、かしこまりぬとなん。

廿日、朝曇。午前六時に、出でたゝせたまへり。今はと、春日宮をふし拜む。飛火野のわたり、鹿のあそべるさま、いとをかし。右の方に、高くみゆる、かつらぎ、いこまならんとおもへど、さだめがたし。高まどやまのふもとをゆく。めでたき山のすがたなり。木立すくなけれど、村々と、わかばさしたるが、うるはしう見ゆ。右の方の高ねには、日かげさしながら、雨ふり出でたり。此のわたり、飯あひ川わに、

池なども有りと聞けど、何方ならん。人丸塚と書きたるあれど、こゝよりはみえず。石上神宮も、御車のうちながら、拝ませ給へり。丹波市にて休らひたまふ。大和の神社のみまへをすぐ、引手山はあれど、車はとゞまらずして、三輪になりぬ。神社敎會所にて、いこはせたまひて、大神にまうでさせたまふ。村さめ、そら〳〵とふり出でたり。この山には、拝殿ばかりにて、みやしろはなし。宮、

かげたかき杉のみどりのそこしへによを守るらん三輪の大神」とよませたまへり。

みうしろにぬかづきながら、

あらはにもみかげをあふぐこゝちして高したふとし三輪の神杉」。「めにこそみえね神やますらん」と、香川宗匠のよみたまひし、げにもと思ひいづ。初瀬川にそひてゆく。このわたりや、古川のへならんとおもへど、二もとの杉とおぼしきは、見えず。やう〳〵、はせでらにいたりて、いくそくともしらぬきざはしをのぼる。宮は、みこしなり。人々は、かちなり。雨、いたくふりいでたるを、からうじて、のぼりはてぬ。ともし火。ともして、おくふかく、いらせ給へり、觀世音のみぞう、高きこと、二丈許ならん。人のたけは、みわしに及ぶまで也。み堂のつくりさま、い

かしより、はる〳〵、人のまうづるも、しるく、みちたらひたり。臺より、したを見れば、人も、ちひさくみゆるまで、高し。きざはしのかたへに、貫之朝臣の手栽梅としるせるあり。「花ぞむかし」のとよみ給ひしや、此のわたりなりけん。いと、おぼつかなし。小池坊にて、ひるのおもの、聞こしめす。はせでらの寶物、さま〴〵、つらねたる中に、釋尊苦業のみ像有り。

忍ばれぬうきをしのびて法の山たかきをしへやよにひろめけむ」。ねすみ燈臺など、めづらしき物多かり。もとのみちをかへらせ給ひ、今夜の御泊、櫻井の來迎寺につかせ給ふ。こゝより、多武峰には、のぼらせ給ふ也。雨ふりたるに、人々のなやまんことを、おぼしなげかせ給ふに、やがて、晴れわたり、日影さしそめたり。一の鳥居より、みこし奉る。五十町餘りと聞く。道は、谷川のながれにそひて、聞きしよりは、さかしからず。家たちつゞきて、山も、大かたは、はたとなれり。

やまふかゝなるともしらずみちのべにつらなる人の絶間なければ」。

副島伯爵校閲
東久世伯爵著　松本楓湖畫

尋常小學修身入門　全一册　上製二錢八厘

全　教師用　全一册　上製七錢

尋常小學修身書　全四册　每册七錢八厘

全　教師用　全四册　上製各册十二錢

高等小學修身書　全四册　每册九錢七厘

全　教師用　全四册　上製各册廿五錢

中學國史　全六册

高等小學國史　全三册　每册十九錢

尋常小學國史談　全二册　全十錢

發兌所　國光社

女鑑第五十九號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通送にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月貳回發行　五日　廿日

定價	壹册金十錢
三ヶ月前金	五十五錢
半ヶ年前金	壹圓
但全國無遞送料	
廣告料	五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿七年四月四日印刷
同　年同月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所　國光社

（明治二十四年八月八日內務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）
（印刷所　東京國光社印刷部）